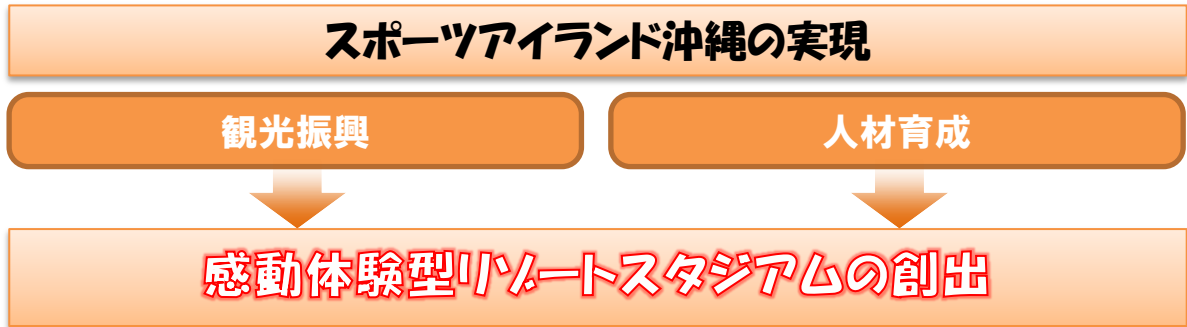


第2章 基本方針

1. 本章の概要

(1) スタジアムのテーマ



(2) 整備方針

沖縄観光の魅力を高める新たな観光拠点の創出

- ◇ スポーツを核とした多様なエンターテインメント空間を形成する。
- ◇ 沖縄観光の楽しみの選択肢を増やす新たな都市型リゾートを創出する。

子どもたちとスポーツが触れ合うきっかけづくり

- ◇ 子どもたちに夢を与え、スポーツに取り組むきっかけづくりを行う。
- ◇ スポーツをとおして、何事にも積極的に取り組む人材を育成する。

文化交流・国際交流等多様な体験空間の創出

- ◇ スタジアムや複合施設を活用した多様な体験の機会を創出する。
- ◇ 試合のない時でも多くの人が集うにぎわい空間を創出する。

(3) スタジアムの規模

◇ J1 ホームスタジアムの規模は15,000席以上であるが将来的に20,000席とすることを協議。

◇ 一定の成績を残すためには選手確保（人件費）が必要であり、入場料収入は重要。
◇ J1クラブの安定的な運営には、2万人規模のスタジアムとそれに見合った入場者数が必要。

J1クラブには**収容2万人**のスタジアムが必要

集客力向上が課題

2. 沖縄におけるスタジアムのあり方

(1) スタジアムのテーマ

沖縄県は“スポーツアイランド沖縄”の実現に向けて、競技スポーツ及び生涯スポーツの振興を図るとともに、スポーツキャンプやイベントの誘致に取り組むなど、スポーツコンベンションを推進し観光振興に寄与してきた。

スポーツ分野において、サッカーは人気が高くアウェイツーリズムなど新たな誘客が期待され、県のスポーツコンベンション誘致戦略において重点競技の一つに位置付けられている。

また、トップアスリートのフェアプレー精神や目標に向かって努力する姿は、見る人に感動や挑戦することの大切さを教え、とりわけ子どもたちに刺激を与え人材育成に寄与する効果が高い。

スタジアムは地域にさまざまな波及効果を与える施設であるが、その期待される効果は地域によって異なり、沖縄県においては、特に観光振興と人材育成の両面が期待されている。

観光振興に関しては、アウェイツーリズムによって新たな観光客を呼び込むほか、沖縄観光に新たな都市型リゾート空間を創出することで沖縄観光に新たな魅力を提供する。

人材育成に関しては、次代を担う沖縄の子どもたちが、スタジアムで活躍する選手のプレーに触発され何ごとにも積極的に取り組み、世界を視野に活躍するきっかけとなることが求められている。

このような目的を達成するためには、本スタジアムに活気と情熱が宿ることが大切であり、選手の迫りに満ちたプレーと観客の熱く応援する心が一体となって、来る人に夢と感動を体験させ、何度でも訪れたい空間とすることが大切であり、本スタジアムが目指すべき施設の姿を以下のとおり設定する。

感動体験型リゾートスタジアムの創出

(2) 整備の目的

1) 沖縄観光の魅力を高める新たな観光拠点の創出

a. スタジアムを核とした都市型リゾートの創出

沖縄県は、海をはじめとする豊かな自然環境や独自の琉球文化などの魅力があり、多くの観光客が訪れる国内有数の観光地である。

これまで沖縄観光といえば、美ら海水族館や首里城、国際通りなど、観光客であれば誰もが訪れる定番の観光地があった。那覇空港から近く周辺に多くの宿泊客が存在するこの立地に新たな集客施設を整備することは、多くの人々が訪れやすい条件が整っており、スタジアムのシンボル性を活かすことで、新たな都市型リゾート拠点を形成することが可能である。

奥武山公園と国場川が織りなす水と緑の景観は、この空間の貴重な資源であり、また、優れた立地条件も集客に有利な条件となる。

この貴重な資源を活用した上で新たな魅力を付加し沖縄観光の新たな定番観光地を創出することを本事業の目的とする。

b. スポーツを核とした多様なエンターテインメント空間

サッカーは世界的に人気が高く、多くの熱狂的なサポーターがスタジアムを埋め尽くすため大規模な集客機能が必要であるが、多くのスタジアムではこの集客機能を活用し大規模コンサート等、大規模なイベント会場としても活用されている。

サッカーの試合観戦や大規模イベントは、利用者が非日常の世界を体験し感動や夢を与えることで、人材育成や社会に活力を与える効果が期待できる。

本スタジアムの目的として、サッカー・Jリーグの公式試合を核としつつ、その枠に捕られない多様なエンターテインメント空間として活用し、新たな観光の魅力づくりにつなげることを本事業の目的とする。

2) 沖縄県の未来を担う優れた人材の育成

a. 子どもたちとスポーツが触れ合うきっかけづくり

地域の活力は、その地域の人々の活躍によって成し遂げられ、次世代を担う優秀な人材の確保は将来の沖縄振興を実現する上での重要な課題の一つである。

本スタジアムは、J1という高いレベルで活躍する地元チームの熱い試合を見せることで、子どもたちがスポーツに興味を抱き、選手に対する憧れや自らもプレーを始めたいと願うなど、より多くの子どもたちがスポーツと関わるきっかけを提供することを目的としている。

b. スポーツを活用した心身の健全育成と国際感覚豊かな人材の育成

スポーツは心身の健全な発達を促し、フェアプレー精神やチームで協力して勝利を目指す体験は、社会性を育む効果が期待できる。

特にサッカーは世界中で多くの子どもたちが取り組んでいることや共通のルールで競い合うため言語を必要としない国際交流の手段であり、より多くの子どもたちが参加できる。

海外の同世代の選手との交流は、子どもたちに刺激を与え、視野を世界に広げることで海外雄飛の精神を育む効果が期待される。

このように子どもたちがスポーツに取り組むことで、さまざまな場面での成長が促され、社会に出てからも自ら積極的に取り組み、課題を解決していく優秀な人材を育成する効果が期待される。

3) 文化交流・国際交流等多様な体験空間の創出

a. スタジアムや複合施設を活用した多様な体験の機会の創出

スタジアムで実施されるJリーグ公式試合や国際試合、大規模イベントはいずれも、非日常的な出来事であり、利用者はそれに参加することで他では得られない経験を得ることができる。

このような体験は参加者の気持ちを高揚させ、社会の活力を高めるとともに、特に子供たちに対しては夢や感動を与えるなど、日常生活では体験できない多様な体験の機会を提供することができる。

本スタジアムは人材育成の視点から、さまざまな大会誘致やイベント開催等に取り組み、本スタジアムでしか実現できない多様な体験の機会を創出する。

b. 多くの人が集うにぎわい空間の創出

スタジアムは、サッカー観戦やイベントを目的に多くの人を集客するため、容量に見合った園路や広場、交通手段等が確保されており、大規模な集客機能は基本性能の一つである。

こうした集客機能にはさまざまな可能性があるが、国内の一般的なスタジアムでは、試合やイベント開催時のみにその機能が活用されてきた。

しかし、このような優れた集客機能をイベントがない日常的な利用に活用することで新たな価値を生み出し、経済効果を高めることが可能である。

利用者が興味を惹くコンテンツを提供することで、にぎわいを創出し、飲食やショッピングなどの活動を誘発するなどの効果が期待でき、スタジアムを核とした新たなにぎわい空間を創出する。

3. 整備の基本方針

(1) スタジアム本体の整備方針

1) 最高レベルの競技環境の実現

本スタジアムはスポーツを活用した観光振興や人材育成を実現することで、沖縄振興に寄与する施設であり、選手の高度なプレーを支える競技機能はスタジアムの最も大切な基本性能である。

サッカーをプレーする上でボールを転がし、選手が倒れることもあるフィールドの品質は重要であり、平坦性やクッション性に優れていることが求められる。

そのフィールドの表面を覆っているスポーツターフと呼ばれる芝については、生育に適した環境整備と必要な管理を適切に実行しなければその品質を維持することはできない。

また、選手がプレーの準備をする更衣室や室内ウォーミングアップエリア、審判のための控室、記録室等が必要であり、プレーを支えるための機能を整備する。

選手の安全を守り、高度なプレーを支えることのできる優れた競技環境を維持するために必要な施設整備・管理体制を構築する。

2) 臨場感が高く快適な観戦環境の整備

多くの人にとって、試合観戦やコンサートなどのイベントは楽しみにしている娯楽の一つであり、それ自体を心置きなく、楽しみたいと考えている。

このため、選手の迫力を近くで体感できるように観客と選手の距離を狭め、また、雨や強烈な日差しなど、過酷な環境から観客を守ることで、試合観戦に集中できる快適な観戦環境を整備する。

3) 子どもたちの夢を育む

本スタジアムで活躍する選手の熱いプレーは子どもたちの憧れの存在として、夢を育む効果が期待される。

特に少年期の子どもにとって夢を抱くことは、自分もそうなりたいと願い努力することで自発的な挑戦につながり、人間としての成長を促す効果も期待できる。

本スタジアムは、青少年の育成を念頭に、憧れの舞台にふさわしい華やかで選手たちと一体感の感じられる空間として整備する。

4) 試合の付加価値を高める効果的な演出

試合観戦に訪れるサポーターは、選手の迫力あるプレーを楽しみ、チームの勝利を願って熱く応援している。

試合は真剣勝負であり演出の入る余地はないが、試合以外の部分に演出を加えることでスタジアムでしか得られない体験を提供し、観戦の魅力を高め、スタジアムに足を運ぶ動機づけにつながると考えられ、入場者数を増やす効果的なツールとなる。

試合の演出はクラブとサポーターが協力して作り上げていくものであるが、例えば米国のメジャーリーグのような大規模な演出は施設側の対応も必要となるため、より魅力的な演出を実現する機能の導入を図る。

5) 多様な楽しみ方のできるサービスの提供

サッカー観戦の楽しみ方は、間近で迫力あるプレーを観戦したい人もいれば、観客席の上部から試合の流れを俯瞰したい人、応援旗など熱い応援を楽しみたい人、試合以外のスタジアムグルメや企画イベントなどを楽しみたい人まで多種多様である。

多様化する利用者のニーズに対応したサービスを提供し、訪れる誰もが楽しめるスタジアムづくりを実現する。

(2) スタジアムを含むエリア全体の整備方針

1) いつでも誰もが楽しめるにぎわい空間の創出

スタジアムが整備されることによって多くの観客が訪れることが想定されるが、試合やイベントが開催される時間は限定的であり、それ以外の時間帯の活用が重要である。

このため、飲食やショッピングなど試合がない時間帯でも楽しめるサービスを提供し、にぎわいを創出することが大切である。

演出照明や景観、音楽など、その場所に身を置くだけで楽しめる空間を創出し、人がその場所に長く滞在することで、自然と消費につなげていく。

本スタジアムを中心に、試合やイベントが開催されていない時でも人が集まる空間として周辺整備を実現する。

2) 多くの人が集まる多様な交流空間の創出

本スタジアムは試合のない時でも、その周囲に魅力的なサービスを配置することで、多くの集客を確保し、日常的なにぎわいを創出することを検討している。

年齢、性別、国籍などによる多様な利用者のニーズに対応するため、複数の楽しみ方を提供すると共に、多くの人を受け入れ、それぞれが安心して活動できる多様な交流空間を整備する。

3) 多様な利用者が共存できる施設整備

奥武山公園は県内各種競技大会の決勝の舞台となるなどスポーツの聖地であると同時に都市化の進んだ市街地に貴重な緑を提供し、県民の憩いの空間としても親しまれている。さらに沖縄の産業まつり等の会場としても親しまれ、多様な利用者が存在している。

今後、さらにスタジアムが整備され、周辺整備が進むことで、利用者が増加していくと考えられるが、多様な利用者が共存できるように施設配置や動線計画に配慮することが必要で

ある。

4) エリア全体で収益を確保し持続的な運営を実現する

スタジアムの特性として、フィールドのコンディションを確保するため利用率を高めることができず、収支は厳しい状況となる場合が多い。このため、欧州のスタジアムでは、本来スタジアムとは関係のない、その街に必要なとされる機能を複合施設として整備し、その収益をスタジアム運営に補てんする取り組みを行っている。

これらは単にスタジアムが複合施設の収益に依存するのではなく、複合施設にとっても人が集まりやすい立地条件やクラブの人气が企業価値を高め、事業にも好影響をもたらすなど、両者が利益を得合える関係を築いていた。

本スタジアムにおいても、複合施設や周辺のにぎわい・宿泊等の活用も考慮し、エリア全体で収益を確保する仕組みを構築し、持続的な運営を実現することが大切である。

5) 都市の景観形成に配慮した施設整備

奥武山公園と国場川の織りなす水と緑の景観は緑の少ないこの地域において、都市に落ち着きと潤いを与える貴重な存在である。

また、那覇空港から降り立ってこれから市街地に向かう観光客が、これからはじまる観光に対して期待を高める良好な景観である。

このような奥武山公園の景観を考慮し、スタジアム整備にあたって、都市の景観形成に配慮していく必要がある。

4. 施設規模の設定

(1) 規模の検討過程

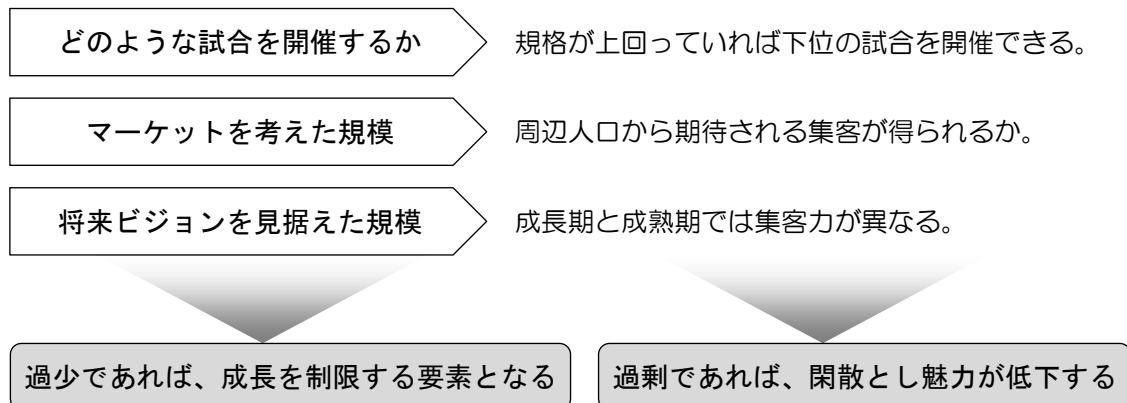
1) 基本的な考え方

スタジアムにとって収容人数は、施設規模や整備コスト、維持管理コストを決定する重要な要素であり、スタジアムの整備から運営に至るまで多大な影響を与えるため、慎重な検討が必要である。

スタジアムの規模については、公益社団法人日本プロサッカーリーグ(以下、「Jリーグ」という。)及び公益財団法人日本サッカー協会(以下、「JFA」という。)が、それぞれ開催する試合に応じて基準を設けており、沖縄県においてどの試合を開催すべきか目標を明確化することが大切である。

しかし、この基準に捕らわれて必要以上に規模を大きくした場合、規模に見合った入場者数が得られず、同じ入場者数であったとしても閑散としてしまうと、観戦の魅力が低下する可能性がある。反対に規模を過少に見積もるとそれが制限となって、入場者が増やせずにクラブの成長を妨げる要素となることも懸念される。このため、適正な規模を設定することが重要である。

規模検討の考え方



適正な規模の算定が重要

2) 施設規模に関する基準

a. クラブライセンス交付規則・スタジアム検査要項(2017年度用/Jリーグ)

〔現行基準〕

Jリーグでは、リーグ戦に参加するための資格要件をクラブライセンス交付規則として定めており、同規則に基づき第三者機関(クラブライセンス交付第一審機関：FIB)によって審査され、その判定結果に基づいてクラブライセンスが交付される。

同規則の施設基準においては、席数に関して芝生席や見切り席などを除いた販売可能な実数でJ1クラブは15,000人以上、J2クラブで10,000人以上を収容するスタジアムが必要であると定めている。

また、Jリーグでは、スタジアムのさらに詳細な基準を定めた「スタジアム検査要項」があり、上記と同規模が設定されている。

第2章 基本方針

クラブライセンス交付規則(2017)

J 1クラブ主管公式試合	15,000人以上
J 2クラブ主管公式試合	10,000人以上

スタジアム検査要項(2017年度用)

J 1	15,000人以上
J 2	10,000人以上

※芝生席はカウントしない。

※椅子席で10,000席以上(ベンチシートは幅45cm以上)

※どの席からもピッチ全体が見渡せる。

〔基準の改正に向けた議論〕

上記は、現行の基準であるがJリーグ理事会において、スタジアムの規模が制限となって入場者数を増やすことができず、選手確保等のチーム運営に支障をきたす事例も散見されることから、将来的にJ1クラブのスタジアム規模を20,000人以上にするという議論が行われている。

現行基準で整備した場合、整備時期によっては、当初からJ1規格スタジアムと認められない可能性もあり、留意が必要である。

b. スタジアム標準(JFA)

日本サッカー界を統括し代表するJFAでは、FIFAワールドカップなど各種世界大会を誘致するため、世界を視野に入れた魅力的なスタジアム環境を創出する必要があり、サッカーの魅力の世界中に発信する施設として、スタジアムのあるべき姿を示した整備基準である「スタジアム標準」を発表している。

この中では、主催できる大会に応じてスタジアムをクラス分けしており、クラスSからクラス4まで、5区分を設定している。

これらはJFAが主催又は誘致する各種国際的な競技会の会場選定における重要な要素の一つとなっている。

スタジアムクラス別収容人数(新設・スタジアム標準)

クラス	収容人数	対象となる大会(リーグ)
クラスS	40,000人以上	FIFAワールドカップ、AFCチャンピオンズリーグ(決勝トーナメント)、日本代表(A代表)公式試合等
クラス1	20,000～40,000人	AFCチャンピオンズリーグ、日本代表(オリンピック)公式試合、J1等
クラス2	15,000～20,000人	日本代表(U20)公式試合、J2等
クラス3	5,000～15,000人	日本代表(U17)公式試合
クラス4	～5,000人	地域リーグ決勝、JFL

c. 施設規模の基準に関するまとめ

前記のJリーグ基準、JFA基準を一覧表にまとめたものが下表であり、現行のJ1公式試合に活用するのであれば15,000人規模でよいが、将来のJ1基準、AFCチャンピオンズリーグ、日本代表(オリンピック)公式試合等を開催するのであれば20,000人以上の規模が必要である。

施設規模に関するJリーグ・JFAの基準一覧表

	15,000人	20,000人	25,000人	40,000人～
Jリーグ 基準	J1公式戦(現行)			
	J1公式戦(将来)			
JFA 基準	← クラス2 → 15,000～20,000	← クラス1 → 20,000～40,000		← クラスS → 40,000～
	ACLリーグ戦			
				ACLリーグ決勝
	オリンピック代表戦			
				A代表戦

3) 入場者数とクラブ運営

Jリーグに所属するクラブは、主催する試合を開催することによって、収益を上げており、チケット収入は重要な収入源の一つである。ここで得られた収益は、選手契約やチームの強化等に活用されるため、強いチームを育てるためには一定規模以上の入場者数が必要となる。

また、スタジアムによる地域への波及効果は多くの人が集まり、熱く応援する心から生まれてくるため、スタジアムの価値は入場者数と比例すると言い換えることも出来る。

a. Jリーグの入場者数

〔カテゴリー別入場者数〕

入場者数については、上位のカテゴリーほど入場者数が多いことが顕著であり、J1では平均 17,803 人、J2では平均 6,845 人、J3では 2,432 人の入場者数がある。

Jリーグカテゴリー別入場者数(2015)

	平均		最大		最小	
J 1	17,803	62%	53,148	98%	6,100	18%
J 2	6,845	36%	20,234	102%	1,227	6%
J 3	2,432	23%	9,040	88%	461	2%

これは後述するクラブ経営にも関わってくるが、対象とするカテゴリーに応じて、最低限求められる入場者数があり、上位のクラブを維持するためには相応の入場者数が必要である。

〔クラブ別入場者数〕

各クラブの平均入場者数は右表のとおりであり、平均入場者数で 40,000 人近い観客を集めるクラブから、10,000 人にとどまっているクラブまで、その差は大きい。

また、リーグ成績は一概に入場者数に比例するとは言いが、入場者数 15,000 人を切るクラブは湘南の 8 位を最高に 10 位より下位に位置し、関連は否定できない。

これらは平均入場者数を比較しており同じクラブでも開幕戦や優勝争いの懸かった試合、対戦チームによっては多くの入場者数があり、反対に優勝チームが決定した後の消化試合や試合日程によって、入場者数が少ない試合もある。

このため、スタジアムの規模設定にあたっては、平均入場者数ではなく、最大入場者数を見込んで規模を決定する必要がある。

平均入場者数が 12,000 に達していない下位 4 クラブ(湘南、甲府、柏、山形)は最大入場者数でも 15,000 人を割り込んでいるが、このうち 3 クラブ(湘南、甲府、柏)は、スタジアムの収容人数が制限となって最大入場者数を増やすことができないという事情がある。

下位に位置するクラブは、常に J2 降格の危機に直面しており、安定的に中位以上の成績を収めることが人気を維持する上でも重要である。このため、スタジアムの規模が制限とな

J1クラブ入場者数(2015)

リーグ戦順位	クラブ名	平均入場者数	最大入場者数
3	浦和レッズ	38,745	53,148
4	FC東京	28,784	42,604
7	横浜F・マリノス	24,221	44,226
15	アルビレックス新潟	21,936	31,324
6	川崎フロンターレ	20,999	24,992
16	松本山雅FC	16,823	18,906
5	鹿島アントラーズ	16,423	29,030
1	サンフレッチェ広島	16,382	33,210
12	ヴィッセル神戸	16,265	24,027
9	名古屋グランパス	16,240	33,558
2	ガンバ大阪	15,999	18,842
14	ベガルタ仙台	14,924	19,375
17	清水エスパルス	14,803	19,736
11	サガン鳥栖	13,450	20,792
8	湘南ベルマーレ	12,208	14,581
13	ヴァンフォーレ甲府	11,297	14,176
10	柏レイソル	10,918	14,055
18	モンテディオ山形	10,030	14,320

って入場者数を増やせないクラブは、そのこと自体運営上不利な条件となっている。

先ほど示した J 1 ホームスタジアムの規模に関する議論は、このような各クラブの運営状況が根拠となっている。

なお、J 1 リーグ各クラブの入場者数をスタジアムごとに整理したものは下表である。

J 1 リーグスタジアム別入場者数(2015/年間順位順)

No.	クラブ名/スタジアム名	収容	回数	平均		最大		最小	
1	サンフレッチェ広島								
	エディオンスタジアム広島	36,906	17	16,382	44%	33,210	90%	7,966	22%
2	ガンバ大阪								
	万博記念競技場	21,000	17	15,999	76%	18,842	90%	10,702	51%
3	浦和レッズ								
	埼玉スタジアム2002	62,010	17	38,745	62%	53,148	86%	22,363	36%
	浦和駒場スタジアム	21,500	0	-	-	-	-	-	-
4	F C 東京								
	味の素スタジアム	48,999	17	28,784	59%	42,604	87%	12,727	26%
5	鹿島アントラーズ								
	県立カシマサッカースタジアム	38,014	17	16,423	43%	29,030	76%	6,923	18%
6	川崎フロンターレ								
	等々力陸上競技場	26,827	17	20,999	78%	24,992	93%	14,881	55%
7	横浜 F・マリノス								
	日産スタジアム	72,081	15	26,013	36%	44,226	61%	14,848	21%
	ニッパツ三ツ沢球技場	15,440	2	10,784	70%	13,529	88%	8,038	52%
8	湘南ベルマーレ								
	Shonan BMWスタジアム平塚	15,200	17	12,208	80%	14,581	96%	9,157	60%
9	名古屋グランパス								
	パロマ瑞穂スタジアム	20,223	8	13,646	67%	17,624	87%	9,986	49%
	豊田スタジアム	41,255	9	18,546	45%	33,558	81%	13,662	33%
10	柏レイソル								
	日立柏サッカー場	15,109	17	10,918	72%	14,055	93%	6,701	44%
11	サガン鳥栖								
	ベストアメニティスタジアム	24,130	17	13,450	56%	20,792	86%	7,524	31%
12	ヴィッセル神戸								
	ノエビアスタジアム神戸	28,483	15	16,494	58%	24,027	84%	7,696	27%
	神戸総合運動公園ユニバー記念競技場	35,910	2	14,554	41%	14,637	41%	14,471	40%
13	ヴァンフォーレ甲府								
	山梨中銀スタジアム	15,859	17	11,297	71%	14,176	89%	7,015	44%
14	ベガルタ仙台								
	ユアテックスタジアム仙台	19,694	17	14,924	76%	19,375	98%	12,488	63%
	ひとめぼれスタジアム宮城	49,133	0	-	-	-	-	-	-
15	アルビレックス新潟								
	デンカビッグスワンスタジアム	41,684	17	21,936	53%	31,324	75%	16,068	39%
16	松本山雅 F C								
	松本平広域公園総合球技場	20,336	17	16,823	83%	18,906	93%	11,743	58%
17	清水エスパルス								
	I A I スタジアム日本平	20,248	16	14,526	72%	19,736	97%	11,348	56%
	エコパスタジアム	51,697	1	19,232	37%	19,232	37%	19,232	37%
18	モンテディオ山形								
	NDソフトスタジアム山形	20,784	17	10,030	48%	14,320	69%	6,100	29%
J 1 平均/最大/最小		-	-	17,803	62%	53,148	98%	6,100	18%

第2章 基本方針

b. 入場者数とクラブ経営

スタジアムの入場料収入は選手の人件費等、クラブの運営に活用される。

J1上位クラブの大半は、チームの営業費用として、30～40億円程度の費用を計上しており、このうちの40～50%を選手の人件費に充てている。反対に下位クラブのいくつかは、10～20億円の費用で運営しており、人件費がチームの成績に影響を与えている可能性は否定できない。

このためクラブ運営において収益の確保は重要であり、総収入の20～30%を占める入場料収入は重要な収入源の一つである。

営業収益が極端に多い浦和を除き、大半のクラブは客単価が2,000円台であり、収入を増やすためには、客単価を上げるよりも、入場者数を増やす方が有効であると推察される。

これらの経営情報から、地域への波及効果が高い上位カテゴリーで活躍するためには、J1クラブにふさわしい収益を上げて人件費を確保する必要があり、入場料収入とその収入源となる入場者数の確保は重要である。

J1クラブの経営情報－1 (2015/年間順位順) (百万円)

科目	広島	G大阪	浦和	FC東京	鹿島	川崎F	横浜FM	湘南	名古屋	柏
営業収益	3,610	4,282	6,088	4,678	4,311	4,077	4,567	1,561	4,446	3,019
広告料収入	1,469 40.7%	1,907 44.5%	2,549 41.9%	1,710 36.6%	1,861 43.2%	1,569 38.5%	2,256 49.4%	573 36.7%	2,775 62.4%	1,928 63.9%
入場料収入	638 17.7%	795 18.6%	2,174 35.7%	966 20.6%	788 18.3%	777 19.1%	948 20.8%	335 21.5%	727 16.4%	518 17.2%
その他収入	1,503	1,580	1,365	2,002	1,662	1,731	1,363	653	944	573
営業費用	3,440	4,205	5,961	3,993	4,652	3,977	4,567	1,517	4,349	3,083
チーム人件費	1,809 52.6%	1,956 46.5%	2,099 35.2%	1,641 41.1%	2,023 43.5%	1,685 42.4%	1,860 40.7%	699 46.1%	2,086 48.0%	1,888 61.2%
その他経費	1,631	2,249	3,862	2,352	2,629	2,292	2,707	818	2,263	1,195

参考：総入場者数と客単価

科目	広島	G大阪	浦和	FC東京	鹿島	川崎F	横浜FM	湘南	名古屋	柏
総入場者数(人)	278,499	271,984	658,668	489,336	279,185	356,976	411,759	207,539	276,082	185,609
客単価(円)	2,291	2,923	3,301	1,974	2,823	2,177	2,302	1,614	2,633	2,791

J1クラブの経営情報－2 (2015/年間順位順) (百万円)

科目	鳥栖	神戸	甲府	仙台	新潟	松本	清水	山形	平均
営業収益	2,489	3,663	1,525	2,239	2,510	2,149	3,142	1,813	3,343
広告料収入	1,203 48.3%	2,198 60.0%	751 49.2%	909 40.6%	1,038 41.4%	923 43.0%	1,417 45.1%	446 24.6%	1,527 45.7%
入場料収入	576 23.1%	425 11.6%	354 23.2%	660 29.5%	711 28.3%	597 27.8%	551 17.5%	281 15.5%	712 21.3%
その他収入	710	1,040	420	670	761	629	1,174	1,086	1,104
営業費用	2,432	3,561	1,470	2,222	2,795	1,778	3,460	1,700	3,287
チーム人件費	1,105 45.4%	1,767 49.6%	736 50.1%	1,031 46.4%	1,138 40.7%	821 46.2%	1,526 44.1%	503 29.6%	1,465 44.6%
その他経費	1,327	1,794	734	1,191	1,657	957	1,934	1,197	1,822

参考：総入場者数と客単価

科目	鳥栖	神戸	甲府	仙台	新潟	松本	清水	山形	平均
総入場者数(人)	228,644	276,512	192,042	253,705	372,908	285,992	251,644	170,518	302,645
客単価(円)	2,519	1,537	1,843	2,601	1,907	2,087	2,190	1,648	2,287

※網掛けは、専用スタジアムをホームとするクラブ。

第2章 基本方針

営業収益ランキング (百万円)

No.	クラブ名	営業収益	備考
1	浦和	6,088	リーグ3位
2	FC東京	4,678	リーグ4位
3	横浜FM	4,567	リーグ7位
4	名古屋	4,446	リーグ9位
5	鹿島	4,311	リーグ5位
6	G大阪	4,282	リーグ2位
7	川崎F	4,077	リーグ6位
8	神戸	3,663	リーグ12位
9	広島	3,610	リーグ1位
10	清水	3,142	リーグ17位
11	柏	3,019	リーグ10位
12	新潟	2,510	リーグ15位
13	鳥栖	2,489	リーグ11位
14	仙台	2,239	リーグ14位
15	松本	2,149	リーグ16位
16	山形	1,813	リーグ18位
17	湘南	1,561	リーグ8位
18	甲府	1,525	リーグ13位

入場料収入ランキング (百万円)

No.	クラブ名	入場料収入	比率	備考
1	浦和	2,174	35.7%	リーグ3位
2	FC東京	966	20.6%	リーグ4位
3	横浜FM	948	20.8%	リーグ7位
4	G大阪	795	18.6%	リーグ2位
5	鹿島	788	18.3%	リーグ5位
6	川崎F	777	19.1%	リーグ6位
7	名古屋	727	16.4%	リーグ9位
8	新潟	711	28.3%	リーグ15位
9	仙台	660	29.5%	リーグ14位
10	広島	638	17.7%	リーグ1位
11	松本	597	27.8%	リーグ16位
12	鳥栖	576	23.1%	リーグ11位
13	清水	551	17.5%	リーグ17位
14	柏	518	17.2%	リーグ10位
15	神戸	425	11.6%	リーグ12位
16	甲府	354	23.2%	リーグ13位
17	湘南	335	21.5%	リーグ8位
18	山形	281	15.5%	リーグ18位

※比率は、営業収益に占める入場料収入の比率。

広告料収入ランキング (百万円)

No.	クラブ名	広告収入	比率	備考
1	名古屋	2,775	62.4%	リーグ9位
2	浦和	2,549	41.9%	リーグ3位
3	横浜FM	2,256	49.4%	リーグ7位
4	神戸	2,198	60.0%	リーグ12位
5	柏	1,928	63.9%	リーグ10位
6	G大阪	1,907	44.5%	リーグ2位
7	鹿島	1,861	43.2%	リーグ5位
8	FC東京	1,710	36.6%	リーグ4位
9	川崎F	1,569	38.5%	リーグ6位
10	広島	1,469	40.7%	リーグ1位
11	清水	1,417	45.1%	リーグ17位
12	鳥栖	1,203	48.3%	リーグ11位
13	新潟	1,038	41.4%	リーグ15位
14	松本	923	43.0%	リーグ16位
15	仙台	909	40.6%	リーグ14位
16	甲府	751	49.2%	リーグ13位
17	湘南	573	36.7%	リーグ8位
18	山形	446	24.6%	リーグ18位

※比率は、営業収益に占める広告料収入の比率。

チーム人件費ランキング (百万円)

No.	クラブ名	人件費	比率	備考
1	浦和	2,099	35.2%	リーグ3位
2	名古屋	2,086	48.0%	リーグ9位
3	鹿島	2,023	43.5%	リーグ5位
4	G大阪	1,956	46.5%	リーグ2位
5	柏	1,888	61.2%	リーグ10位
6	横浜FM	1,860	40.7%	リーグ7位
7	広島	1,809	52.6%	リーグ1位
8	神戸	1,767	49.6%	リーグ12位
9	川崎F	1,685	42.4%	リーグ6位
10	FC東京	1,641	41.1%	リーグ4位
11	清水	1,526	44.1%	リーグ17位
12	新潟	1,138	40.7%	リーグ15位
13	鳥栖	1,105	45.4%	リーグ11位
14	仙台	1,031	46.4%	リーグ14位
15	松本	821	46.2%	リーグ16位
16	甲府	736	50.1%	リーグ13位
17	湘南	699	46.1%	リーグ8位
18	山形	503	29.6%	リーグ18位

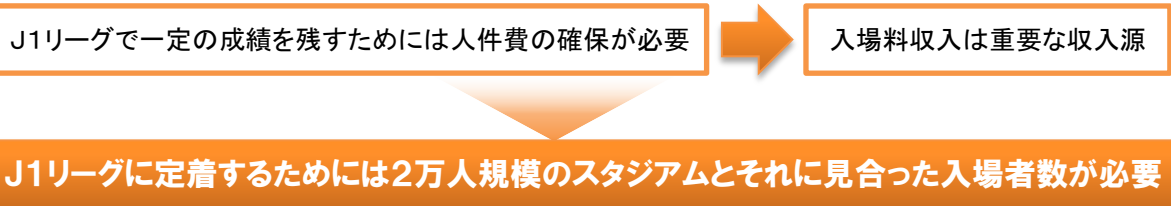
※比率は、営業費用に占めるチーム人件費の比率

第2章 基本方針

c. J1クラブの運営に必要な施設基準

Jリーグに属する各クラブは、一定の成績を残すためにそのカテゴリーに見合った選手を獲得する必要があり、その収入源として入場料収入は重要である。

各試合の入場者数は対戦相手やその時の成績、日程等に左右され、平均を基準とするのではなく、必要な最大入場者数を確保した上で、各試合をそれに近づけていくという取り組みが重要である。J1クラブの大半はシーズン中の最大入場者数が20,000人前後を上回っており、逆説的にJ1クラブを維持するためには、最大20,000人収容のスタジアムとそれに見合った入場者数が必要である。



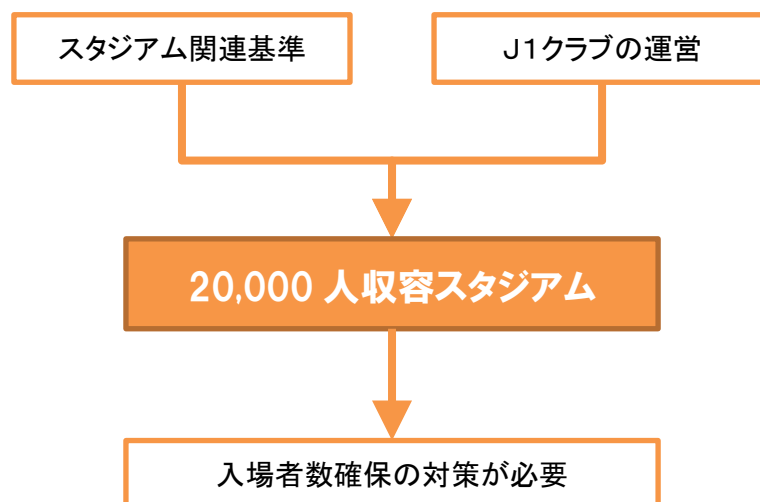
(2) 沖縄県におけるJリーグ規格スタジアムの規模

1) 沖縄県にJ1クラブを維持するために必要なスタジアム規模

スタジアム関連の基準やJ1クラブの運営状況等に関する調査を行った結果、J1リーグで活躍するクラブを沖縄県で維持するためには20,000人収容のスタジアムとそれに見合った入場者数が必要であり、県として整備するスタジアムの規模は20,000人と設定する。

この設定は、J1クラブを維持するための最低限の規模であり、実際の入場者数は、同じシーズンでも変動が大きい。それに見合った入場者数を確保する必要があり、沖縄の市場規模を推計するとともに沖縄県のサッカー関連団体、本スタジアムをホームとするクラブチームが対応すべき集客向上策を検討することが必要である。

沖縄県にJ1クラブを維持するために必要なスタジアム規模設定の考え方



2) 20,000人収容スタジアムの付帯的なメリット

スタジアム規模を20,000人とすることで、J1公式試合の開催以外にも複数のメリットが想定され、以下にその概要を示す。

- ◇クラブが一定の入場料収入を確保することで、優秀な選手の獲得など、安定的な運営を実現できる。
- ◇JFAにおける“クラス1”に該当し、ACL、オリンピック代表戦等の誘致が可能となり、新たな集客が期待できる。

参考：各スタジアム規模の評価

スタジアムに関する各種基準及び計画地への配置の可否、想定される整備コスト、維持管理費等の各要素を一覧表にまとめたものが下表である。

	15,000人	20,000人	25,000人	40,000人～
Jリーグ 基準	J1公式戦(現行)			
	J1公式戦(将来)			
JFA 基準	← クラス2 → 15,000～20,000	← クラス1 → 20,000～40,000		← クラスS → 40,000～
	ACLリーグ戦			
				ACLリーグ決勝
	オリンピック代表戦			
				A代表戦
計画地 配置可否	○可能	○可能	○可能	×不可
参考整備 コスト	158億円 (96～219億)	179億円 (108～249億)	196億円 (118～274億)	249億円 (149～349億)
参考維持 コスト	222,706千円	222,844千	222,983千円	223,737千円
総合評価	○	◎	○	×

※参考整備コスト・参考維持コストは比較のための概算値であり、実際の金額の算出にあたっては、条件の確定など、さらなる検討が必要である。

(3) 入場者数の推計

前項で示したようにJ1クラブを運営するためには20,000人規模のスタジアムとそれに見合った入場者数が必要であるが、沖縄県内で実際に入場者数を確保できるのか検証する必要がある。

スタジアムの集客は、そのクラブの人気や成績、対戦相手などによって大きく変動し、市場規模だけでは予想しきれない可能性が高い。

また、各クラブは集客向上に向けてさまざまな工夫をしている。スタジアムが完成するまでの間に取り組むことのできるクラブやサッカー協会、行政等が行うべき集客力向上に向けた活動についても整理する。

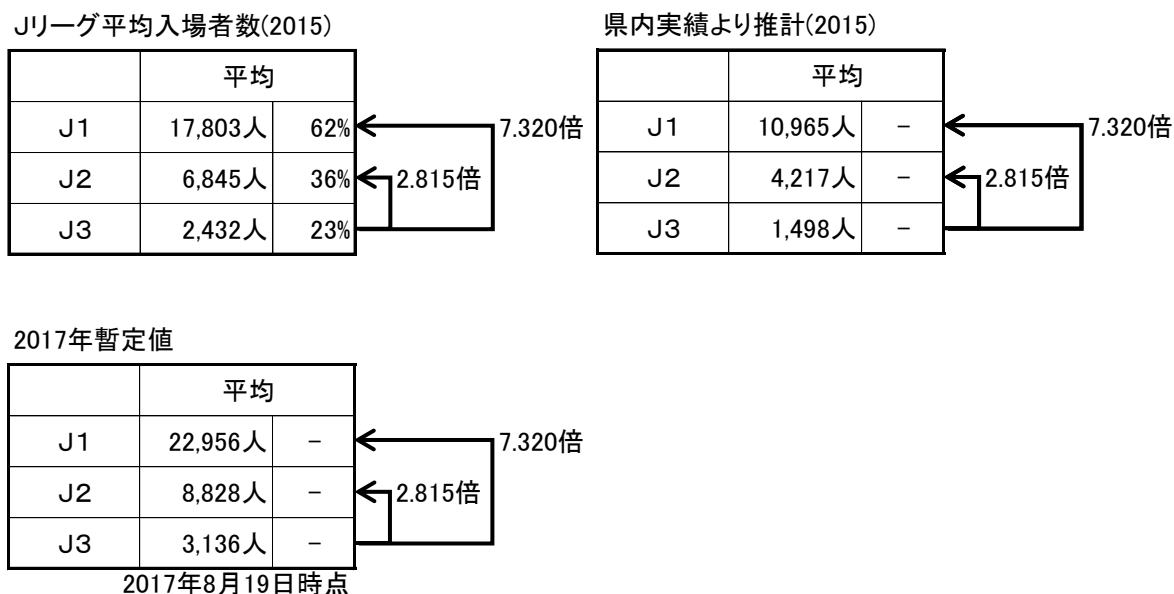
1) 県内実績による入場者数の推計

Jリーグ各クラブの入場者数は試合ごとの変動も大きい、それ以上にクラブ間やカテゴリー間の差が大きく、県内実績とカテゴリーに着目して、入場者数を算出したものが下記である。

一般的に上位のカテゴリーほど入場者数は多い傾向があり、J1クラブの平均入場者数はJ2クラブの平均の約2.8倍、J3クラブの平均の約7.3倍となっている。

これを県内実績と比較すると県内で唯一J3に属するFC琉球の2015年の入場者数の平均は1,498人であり、仮にJ1に昇格することで入場者数が同様の比率で増加すると仮定した場合、入場者数は約11,000人になる。

また、FC琉球は2017年シーズンより経営体制を一新し、これまで以上に入場者数の増加に取り組んでいる。シーズン中のため暫定値であるが、2017年の入場者数(暫定値)を基準値とし、J1に昇格した時に同様の比率で増加すると仮定した場合、入場者数は約23,000人に達すると推計される。



2) 市場規模と発生率による入場者数の推計

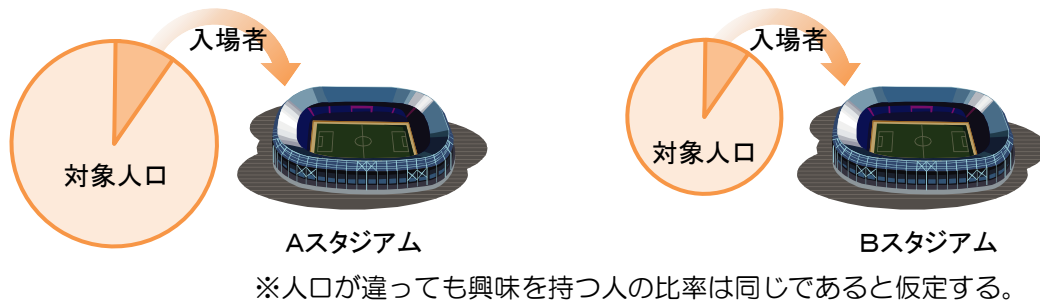
これまでJ1クラブの入場者数の平均や経営状況から、必要な入場者数を算出してきた。この中のいくつかのクラブは大都市をホームとしているが、実際に沖縄県で必要な入場者数が発生する可能性があるかということは、重要な課題の一つである。

本項においては、沖縄県と他の地域の市場規模の比較から算出した入場者数の推計について以下にまとめる。

a. 推計の考え方

市場調査では、一般的に集客事業の入場者数を推計する手法として発生率という考え方をを用いる。この手法は市場にはさまざまな人が存在し、そのサービスを購入するのは、興味を抱いた一部の人であるという考え方に基づいて、対象人口の中の何割の人がそのサービスを購入しているかを調査し、他の地域でも同様の割合で、そのサービスに興味を持つ人がいるであろうと仮定して、顧客数を推計する手法である。

発生率による入場者数推計の概念



b. 誘致圏域の設定と比較対象の選定

市場規模を調査するにあたり、都市部は沖縄県と差異が大きいことから、甲府、仙台、新潟、松本、清水、山形などの地方をホームとするクラブと比較する。

「Jリーグスタジアム観戦者調査 2015」(次ページ参照)では各クラブ観戦者の居住地域が調査されているが、遠方のサポーターが多い鹿島、G大阪、鳥栖を除くと、大半のクラブは観客の8割以上は生活圏の中にスタジアムがあり、地方部では全体の9割とその傾向が高くなる。

また、同調査の中で観客がスタジアムに訪れるまでのアクセス時間は、J1、J2の平均で51分であるが、先の地方部をホームとする各クラブのアクセス時間は40分とさらに近くなる傾向がある。

40分の移動時間を距離に換算すると次式により20kmとなり、半径20km圏を誘致圏域と設定する。

※自動車による市街地の移動速度は、一般的に30km/hであり、ここから距離を換算すると20kmとなる。

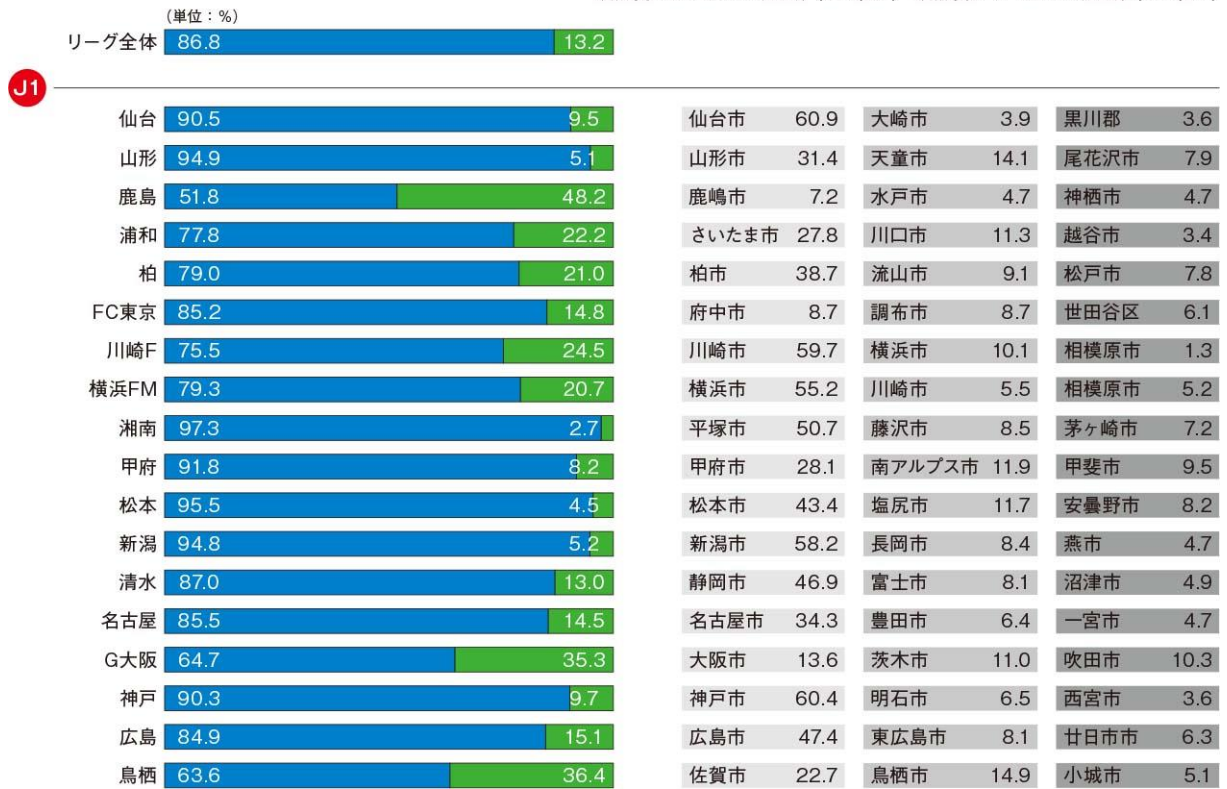
誘致圏計算式： $(40 \text{ 分}/60 \text{ 分}) \times 30 \text{ km/h} = 20 \text{ km}$

第2章 基本方針

居住地（活動区域・市区郡内訳）

■ 活動区域内 ■ 活動区域外

集計対象：ホームクラブ応援者 (n=15,072) 集計対象：ホームクラブ応援者 (n=15,072)

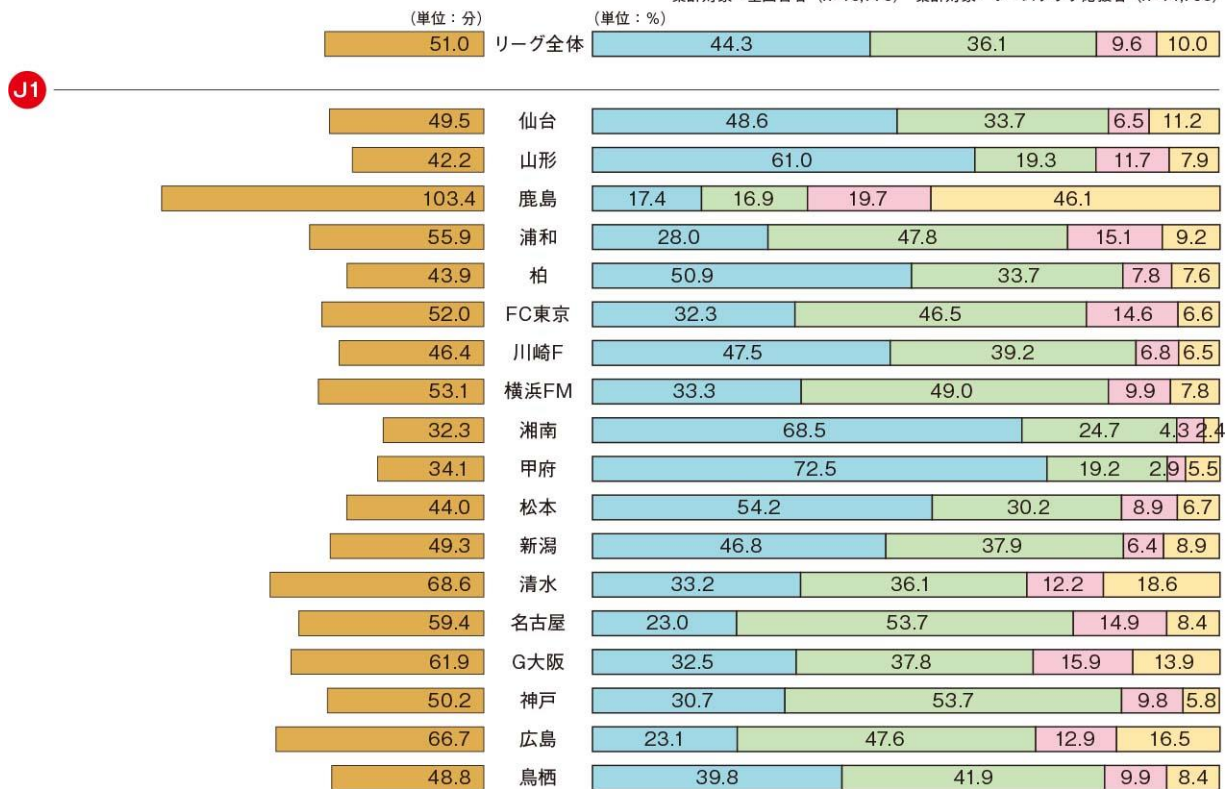


出典：Jリーグスタジアム観戦者調査 2015

平均アクセス時間・アクセス時間分布（クラブ別）

■ 30分以内 ■ 31~60分 ■ 61~90分 ■ 91分以上

集計対象：全回答者 (n=16,776) 集計対象：ホームクラブ応援者 (n=14,796)



出典：Jリーグスタジアム観戦者調査 2015

c. 各クラブの周辺人口と発生率

先にスタジアムの誘致圏域を 20 km圏と設定したが、J 1 各クラブのスタジアムから 20km 圏域の人口を算出し、人口に占めるスタジアム平均入場者数、最大入場者数の比率を算出したものが下表である。

例えば、サンフレッチェ広島では 20 km圏内に約 1,400,000 人の人口があり、平均入場者数 16,382 人は人口の 1.163%にあたり、最大入場者数 33,210 人は人口の 2.357%にあたるという意味である。

前述のように一部誘致圏域の広いクラブも存在すると考えられるが、ここでは比較のため、全てのクラブ誘致圏域を 20 kmに統一した。

2015年度 J 1 リーグスタジアム別入場者数と周辺人口及び発生率

クラブ名/スタジアム名	収容	回数	20km人口	平均入場者	発生率	最大入場者	発生率
サンフレッチェ広島							
エディオンスタジアム広島	36,906	17	1,409,017	16,382	1.163%	33,210	2.357%
ガンバ大阪							
万博記念競技場	21,000	17	7,295,624	15,999	0.219%	18,842	0.258%
浦和レッズ							
埼玉スタジアム2002	62,010	17	7,885,696	38,745	0.491%	53,148	0.674%
F C 東京							
味の素スタジアム	48,999	17	13,109,484	28,784	0.220%	42,604	0.325%
鹿島アントラーズ							
カシマサッカースタジアム	38,014	17	288,845	16,423	5.686%	29,030	10.050%
川崎フロンターレ							
等々力陸上競技場	26,827	17	12,529,262	20,999	0.168%	24,992	0.199%
横浜 F・マリノス							
日産スタジアム	72,081	15	10,101,226	26,013	0.258%	44,226	0.438%
ニッパツ三ツ沢球技場	15,440	2	8,915,431	10,784	0.121%	13,529	0.152%
湘南ベルマーレ							
Shonan BMWスタジアム平塚	15,200	17	3,184,472	12,208	0.383%	14,581	0.458%
名古屋グランパス							
パロマ瑞穂スタジアム	20,223	8	4,631,453	13,646	0.295%	17,624	0.381%
豊田スタジアム	41,255	9	2,328,110	18,546	0.797%	33,558	1.441%
柏レイソル							
日立柏サッカー場	15,109	17	5,988,074	10,918	0.182%	14,055	0.235%
サガン鳥栖							
ベストアメニティスタジアム	24,130	17	1,230,986	13,450	1.093%	20,792	1.689%
ヴィッセル神戸							
ノエビアスタジアム神戸	28,483	15	2,102,329	16,494	0.785%	24,027	1.143%
神戸ユニバー記念競技場	35,910	2	1,972,728	14,554	0.738%	14,637	0.742%
ヴァンフォーレ甲府							
山梨中銀スタジアム	15,859	17	618,680	11,297	1.826%	14,176	2.291%
ベガルタ仙台							
ユアテックスタジアム仙台	19,694	17	1,438,896	14,924	1.037%	19,375	1.347%
アルビレックス新潟							
デンカビッグスワンスタジアム	41,684	17	867,832	21,936	2.528%	31,324	3.609%
松本山雅 F C							
松本平広域公園総合球技場	20,336	17	481,183	16,823	3.496%	18,906	3.929%
清水エスパルス							
I A I スタジアム日本平	20,248	16	746,138	14,526	1.947%	19,736	2.645%
エコパスタジアム	51,697	1	769,273	19,232	2.500%	19,232	2.500%
モンテディオ山形							
NDソフトスタジアム山形	20,784	17	492,693	10,030	2.036%	14,320	2.906%

参考：奥武山周辺人口

クラブ名/スタジアム名	収容	回数	20km周辺人口	平均人数	発生率	最大人数	発生率
奥武山公園	-	-	978,859	-	-	-	-

※人口は平成27年度国勢調査小地域より算出。

第2章 基本方針

d. 比較対象クラブの設定

前出のJ1リーグスタジアム別入場者数と周辺人口及び発生率について、周辺人口及び発生率でソートを掛けたものが下表である。

これによると20km圏内の人口が多いクラブほど都市部に位置しているため、多くの入場者数があったとしても発生率としては低く抑えられる傾向があり、都市部のクラブは比較の対象から除外することが適切であると判断される。

一方、奥武山公園から20km圏内の人口は約980,000人であり、1,000,000人前後を比較の対象と考えると本推計においては、1,200,000人のサガン鳥栖までを比較の対象とすることが妥当と考えられる。

さらに鹿島アントラーズについては、強豪クラブであり、東京駅からシャトルバスが運行されていること、アクセス時間が他のクラブと比較して飛び抜けて高いことを考慮すると誘致圏が他のクラブより広いと判断され、比較の対象としてはふさわしくないため、除外する。

よって、沖縄県と比較するクラブは松本山雅FC、モンテディオ山形、ヴァンフォーレ甲府、清水エスパルス、アルビレックス新潟、サガン鳥栖の6クラブに設定する。

2015年度J1リーグ周辺人口ランキング

クラブ名(スタジアム別)	回数	20km人口
鹿島アントラーズ	17	288,845
松本山雅FC	17	481,183
モンテディオ山形	17	492,693
ヴァンフォーレ甲府	17	618,680
清水エスパルス(日本平)	16	746,138
清水エスパルス(エコパ)	1	769,273
アルビレックス新潟	17	867,832
サガン鳥栖	17	1,230,986
サンフレッチェ広島	17	1,409,017
ベガルタ仙台	17	1,438,896
ヴィッセル神戸(ユニバー)	2	1,972,728
ヴィッセル神戸(ノエビア)	15	2,102,329
名古屋グランパス(豊田)	9	2,328,110
湘南ベルマーレ	17	3,184,472
名古屋グランパス(瑞穂)	8	4,631,453
柏レイソル	17	5,988,074
ガンバ大阪	17	7,295,624
浦和レッズ	17	7,885,696
横浜F・マリノス(三ツ沢)	2	8,915,431
横浜F・マリノス(日産)	15	10,101,226
川崎フロンターレ	17	12,529,262
FC東京	17	13,109,484

2015年度J1リーグ発生率(平均入場者数)ランキング

クラブ名(スタジアム別)	収容	回数	20km人口	平均人数	発生率	最大人数	発生率
鹿島アントラーズ	38,014	17	288,845	16,423	5.686%	29,030	10.050%
松本山雅FC	20,336	17	481,183	16,823	3.496%	18,906	3.929%
アルビレックス新潟	41,684	17	867,832	21,936	2.528%	31,324	3.609%
清水エスパルス(エコパ)	51,697	1	769,273	19,232	2.500%	19,232	2.500%
モンテディオ山形	20,784	17	492,693	10,030	2.036%	14,320	2.906%
清水エスパルス(日本平)	20,248	16	746,138	14,526	1.947%	19,736	2.645%
ヴァンフォーレ甲府	15,859	17	618,680	11,297	1.826%	14,176	2.291%
サンフレッチェ広島	36,906	17	1,409,017	16,382	1.163%	33,210	2.357%
サガン鳥栖	24,130	17	1,230,986	13,450	1.093%	20,792	1.689%
ベガルタ仙台	19,694	17	1,438,896	14,924	1.037%	19,375	1.347%
名古屋グランパス(豊田)	41,255	9	2,328,110	18,546	0.797%	33,558	1.441%
ヴィッセル神戸(ノエビア)	28,483	15	2,102,329	16,494	0.785%	24,027	1.143%
ヴィッセル神戸(ユニバー)	35,910	2	1,972,728	14,554	0.738%	14,637	0.742%
浦和レッズ	62,010	17	7,885,696	38,745	0.491%	53,148	0.674%
湘南ベルマーレ	15,200	17	3,184,472	12,208	0.383%	14,581	0.458%
名古屋グランパス(瑞穂)	20,223	8	4,631,453	13,646	0.295%	17,624	0.381%
横浜F・マリノス(日産)	72,081	15	10,101,226	26,013	0.258%	44,226	0.438%
FC東京	48,999	17	13,109,484	28,784	0.220%	42,604	0.325%
ガンバ大阪	21,000	17	7,295,624	15,999	0.219%	18,842	0.258%
柏レイソル	15,109	17	5,988,074	10,918	0.182%	14,055	0.235%
川崎フロンターレ	26,827	17	12,529,262	20,999	0.168%	24,992	0.199%
横浜F・マリノス(三ツ沢)	15,440	2	8,915,431	10,784	0.121%	13,529	0.152%

e. 類似事例と同様の発生率がある時の入場者数の推計

これまで、各クラブの周辺人口と入場者数の比率から発生率を算出してきたが、ここでは沖縄県の市場規模に類似クラブと同様の発生率があった場合の入場者数を試算する。

平成27年度国勢調査によれば、計画地である奥武山公園から20km 県内の人口は、978,859人であり、仮に地方部をホームタウンとする山形、新潟、甲府、松本、清水、鳥栖と同等の発生率があったと仮定した場合の平均入場者数、最大入場者数を下表に算出した。

前述のようにスタジアムの入場者数は、同じクラブでも入場者数は成績や対戦相手、日程等に左右されるため、スタジアムの規模設定にあたっては、平均入場者数で決定するのではなく、最大入場者数を見込んで規模を決定することが大切である。

各クラブと同等の発生率があった場合の最大入場者数は16,000～38,000人が見込まれる。ただし、この中で松本と新潟は特に人気クラブであり、他と比較して極端に発生率が高いと考えられるため、上位2クラブを除くと最大入場者数は17,000～28,000人となる。

ただし、この試算は各対象クラブと同等の人気、集客力があつたと仮定した場合の推計値であり、実際にはクラブの人気が集客を左右すると考えられ、人気クラブの育成、県民から親しまれるクラブ育成の取り組みは欠かすことができないと考えられる。

類似クラブと同程度の発生率があつた場合の入場者数予測

都市名	20km人口 (各都市)	20km人口 (奥武山)	発生率(平均)		発生率(最大)	
山形の発生率	492,693	978,859	2.036%	19,927	2.906%	28,450
新潟の発生率	867,832	978,859	2.528%	24,742	3.609%	35,331
甲府の発生率	618,680	978,859	1.826%	17,873	2.291%	22,429
松本の発生率	481,183	978,859	3.496%	34,223	3.929%	38,460
清水の発生率	746,138	978,859	1.947%	19,056	2.645%	25,892
鳥栖の発生率	1,230,986	978,859	1.093%	10,695	1.689%	16,533

類似クラブと同等の発生率(最大)があつた場合の沖縄の入場者数予測

松本の発生率(3.929%) = 38,000人	新潟の発生率(3.609%) = 35,000人
山形の発生率(2.906%) = 28,000人	清水の発生率(2.645%) = 26,000人
甲府の発生率(2.291%) = 22,000人	鳥栖の発生率(1.689%) = 17,000人

人気・成績によって入場者数は異なる

第2章 基本方針

3) 都道府県人口とJリーグクラブ

1993年に開幕したJリーグはその後、J2、J3と裾野を広げ、現在47都道府県中38都道府県(81%)でクラブが活動している。

これらを都道府県の人口ごとに活動状況を整理したものが下表であり、J1クラブは都市部に集中していることが理解できる。一方、山梨県や佐賀県のように人口の少ない地域でJ1に定着しているクラブもあり、これらクラブの活動は参考になると考えられる。

沖縄県は人口が約140万人であり、J1クラブの中では200万人台と比較的人口の少ない広島県、宮城県、新潟県よりさらに少ないが80万人台である山梨県、佐賀県と比較すると2倍程度の人口を有している。

都道府県別人口とJリーグクラブ

2016

	都道府県	人口	増減率	J1	J2	J3
1	東京都	13,624千人	0.81%	FC東京	町田、東京V	FC東京23
2	神奈川県	9,145千人	0.21%	川崎、横浜FM、湘南	横浜FC	相模原、YS横浜
3	大阪府	8,833千人	-0.07%	G大阪	C大阪	G大阪23、C大阪23
4	愛知県	7,507千人	0.32%	名古屋		
5	埼玉県	7,289千人	0.30%	浦和、大宮		
6	千葉県	6,236千人	0.21%	柏	千葉	
7	兵庫県	5,520千人	-0.27%	神戸		
8	北海道	5,352千人	-0.56%		札幌	
9	福岡県	5,104千人	0.04%	福岡	北九州	
10	静岡県	3,688千人	-0.32%	磐田	清水	藤枝
11	茨城県	2,905千人	-0.41%	鹿島	水戸	
12	広島県	2,837千人	-0.25%	広島		
13	京都府	2,605千人	-0.19%		京都	
14	宮城県	2,330千人	-0.17%	仙台		
15	新潟県	2,286千人	-0.78%	新潟		
16	長野県	2,088千人	-0.52%		松本	長野
17	岐阜県	2,022千人	-0.49%		岐阜	
19	群馬県	1,967千人	-0.30%		群馬	
18	栃木県	1,966千人	-0.41%			栃木
20	岡山県	1,915千人	-0.36%		岡山	
21	福島県	1,901千人	-0.68%			福島
22	三重県	1,808千人	-0.44%			
23	熊本県	1,774千人	-0.67%		熊本	
24	鹿児島県	1,637千人	-0.67%			鹿児島
25	沖縄県	1,439千人	0.35%			琉球
26	滋賀県	1,413千人	0.00%			
27	山口県	1,394千人	-0.78%		山口	
28	愛媛県	1,375千人	-0.72%		愛媛	
29	長崎県	1,367千人	-0.73%		長崎	
30	奈良県	1,356千人	-0.59%			
31	青森県	1,293千人	-1.15%			
32	岩手県	1,268千人	-0.94%			盛岡
33	大分県	1,160千人	-0.51%			大分
34	石川県	1,151千人	-0.26%		金沢	
35	山形県	1,113千人	-0.98%		山形	
36	宮崎県	1,096千人	-0.72%			
37	富山県	1,061千人	-0.47%			富山
38	秋田県	1,010千人	-1.27%			秋田
39	香川県	972千人	-0.41%		讃岐	
40	和歌山県	954千人	-1.04%			
41	山梨県	830千人	-0.60%	甲府		
42	佐賀県	828千人	-0.60%	鳥栖		
43	福井県	782千人	-0.64%			
44	徳島県	750千人	-0.79%		徳島	
45	高知県	721千人	-0.96%			
46	島根県	690千人	-0.58%			
47	鳥取県	570千人	-0.52%			鳥取

※2016年10月1日 推計人口(総務省統計局)

※増減率は、2015年10月1日推計人口(総務省統計局)との比率

※各クラブの文字色は最高位を示す(赤字:J1、青字:J2、緑字:J3)

(4) 入場者数拡大に向けた取り組みについて

1) Jリーグ各クラブの入場者数増加要因の推定

a. 推定される主な要因

Jリーグ各クラブは入場者数の増加に向けて取り組んでいるが、最初から多数の入場者数が存在したわけではなく、取り組みの内容や社会動向などがターニングポイントとなって、入場者数が増加あるいは減少していったと考えられる。

ここでは、各クラブのこれまでの入場者数の変動からいくつかのパターンを見出し、その要因を探っていく。

推定される入場者数増加要因としては以下の4パターンがあると考えられ、次ページ以降にその分析を示す。

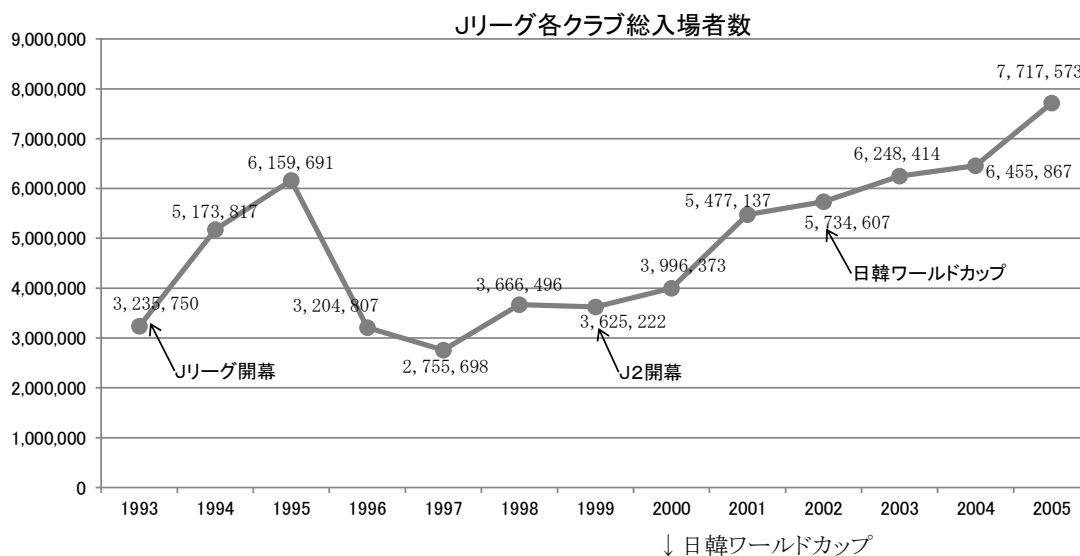
要因1	日韓ワールドカップによる社会的注目と施設整備、Jリーグ全体の市場規模拡大
要因2	J1昇格などのカテゴリー変動
要因3	新たな施設整備・改修など観戦環境の向上 <small>※有為な差が認められクラブがある一方で、成績不振等により効果が上がっていないクラブもある。</small>
要因4	演出の魅力向上や社会貢献など、運営によって地域から支持を得たクラブ
参考	<ul style="list-style-type: none"> ✓ サッカー以外では、注目を浴びるスターの存在が集客に大きな影響を及ぼしている。 ✓ 今ほどパ・リーグ人気が高くなかった時代、松坂選手やイチロー選手が出場する試合では、その試合だけ多くの観客が訪れた。 ✓ 稀勢の里関の横綱昇進によって、現在は相撲のチケット入手が困難になるほど人気が高まっている。

b. 各要因の例示

要因1 日韓ワールドカップによる社会的注目と施設整備、Jリーグ全体の市場規模拡大

1990年代後半のJリーグ市場は、Jリーグ開幕による社会的な注目がひと段落し、入場者数が減少傾向にあった。このような折、J2リーグが開幕しクラブを有する地域が増えたことや2002年日韓ワールドカップによってサッカーに社会的な注目が集まり、さらにワールドカップ会場として新しいスタジアムが整備されたことで観戦環境が改善し、Jリーグ全体の市場規模が拡大したと考えられる。

当時、多くのクラブでワールドカップ開催前後に、集客を高めているが、その集客が維持できていないクラブもあり、大規模イベントは集客増の要因の一つとなるが、そのことが継続的な人気獲得を決定づける要因にまではなっていないことが理解できる。



	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005
札幌		11,953	10,986	12,910	22,228	19,140	10,766	9,466	11,133
↑札幌ドーム整備									
鹿島	16,985	15,345	17,049	17,507	22,425	21,590	21,204	17,585	18,641
↑カシマスタジアム改修									
浦和	20,504	22,706	21,276	16,923	26,720	26,296	28,855	36,660	39,357
↑埼玉スタジアム整備									
FC東京			3,498	11,807	22,313	22,173	24,932	25,438	27,101
↑味の素スタジアム整備									
東京V	10,933	13,338	9,379	7,609	19,396	15,128	17,563	15,059	14,716
↑味の素スタジアム整備									
横浜FM	9,211	19,165	20,095	16,644	20,595	24,108	24,957	24,818	25,713
↑日産スタジアム整備									
新潟			4,211	4,007	16,659	21,478	30,339	37,689	40,114
↑デンカスタジアム整備									
神戸	6,567	7,686	7,691	7,512	13,872	10,467	11,195	15,735	14,913
↑ノエビアスタジアム整備									
大分			3,886	4,818	6,638	12,349	21,373	21,889	22,080
↑大分銀行ドーム整備									

※赤字・網掛けはJ2リーグを示す。

要因2 J1昇格などカテゴリーの昇格

Jリーグ各クラブの入場者数を分析すると、J1など上位のカテゴリーに昇格することで入場者数を伸ばしているクラブが多い。

カテゴリーが昇格することで対戦相手が変わり、対戦相手に有名選手がいることも集客増に影響を与えていると考えられる。

また、何よりも自ら応援するチームが勝利を重ね、より強い相手に果敢に挑んでいく姿は、サポーターの心を刺激し、多くの人がスタジアムに足を運ぶきっかけになっているものと考えられる。

	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
仙台	16,198	15,934	14,453	14,685	14,080	12,951	17,332	15,656	16,600	14,866	15,173	14,924

↑J1昇格134%

山形	6,420	5,949	5,085	4,243	6,273	12,056	11,710	9,325	7,355	7,020	6,348	10,030
----	-------	-------	-------	-------	-------	--------	--------	-------	-------	-------	-------	--------

↑J1昇格192%

↑J1昇格158%

横浜FC	4,219	5,938	5,119	14,039	6,793	3,535	5,791	5,770	6,039	6,064	5,146	5,113
------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

↑J1昇格274%

湘南	4,691	5,746	5,365	4,677	5,994	7,273	11,095	6,943	6,852	9,911	8,478	12,208
----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	--------

↑J1昇格153%

↑J1昇格145%

↑J1昇格144%

甲府	6,370	6,931	12,213	13,734	10,354	11,059	12,406	12,106	10,407	12,614	12,171	11,297
----	-------	-------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

↑J1昇格175%

↑J1昇格98%

↑J1昇格121%

松本									9,531	11,041	12,733	16,823
----	--	--	--	--	--	--	--	--	-------	--------	--------	--------

↑J2昇格

↑J1昇格132%

福岡	8,743	10,786	13,780	9,529	10,079	7,763	8,821	10,415	5,586	5,727	5,062	8,692
----	-------	--------	--------	-------	--------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------

↑J1昇格128%

↑J1昇格118%

鳥栖	3,610	7,855	7,465	6,114	7,261	5,939	6,633	7,731	11,991	12,026	14,137	13,450
----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	--------	--------	--------

↑J1昇格155%

京都	7,807	7,857	9,781	6,629	13,687	11,126	10,510	6,294	7,273	7,891	7,520	7,491
----	-------	-------	-------	-------	--------	--------	--------	-------	-------	-------	-------	-------

↑J1昇格124%

↑J1昇格206%

↑J2降格60%

C大阪	14,323	17,648	13,026	6,627	10,554	9,912	15,026	14,145	16,913	18,819	21,627	12,232
-----	--------	--------	--------	-------	--------	-------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

↑J2降格51%

↑J1昇格152%

↑J2降格57%

※赤字・網掛けはJ2リーグを示す。

要因3 新たな施設整備・改修など観戦環境の向上

Jリーグ各クラブの入場者数を分析すると、スタジアム整備・改修など、新たな観戦環境が整うことによって、集客を増していると考えられるクラブがある。

先に挙げたワールドカップを要因とする入場者数の増加についても、スタジアム整備の影響が大きいと考えられ、観戦環境の質が入場者数に与える影響は大きいと考えられる。

ただし、スタジアム整備だけが入場者数の増加の決定要因になっているのではなく、整備後の成績不振等で、入場者数を拡大できていないケースもあり、スタジアムのキャパシティによって、これまで入場できていなかった人を呼び込んでいることが考えられる。

また、スタジアムグルメなど試合観戦とは別の楽しみを提供して観戦動機を高めたり、観戦環境を整えることで、それまで足を運んでいなかった層を取り込むなどの効果が考えられるものの、これらはどれも副次的な要因であり、観戦の主目的である試合の内容や結果がこれに追いついていなければ、入場者数の増加にはつながらないことを示していると推察される。

	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
川崎F	18,562	17,340	17,807	16,644	16,661	20,999	22,136

↑メインスタンド改修4,338人増加

	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
G大阪	16,654	16,411	14,778	12,286	14,749	15,999	25,342

↑ J2降格

↑スタジアム整備9,343人増加

	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
千葉	10,012	9,535	13,393	14,149	14,084	14,730	11,689	9,680	9,281

↑スタジアム整備3,858人増加

↑ J2降格

※赤字はJ2リーグを示す。

要因4 演出の魅力向上や社会貢献など、運営によって地域から支持を得たクラブ

これまでの要因は大規模イベントやスタジアム整備など、外的な要因による入場者数の増加であり、J1昇格についても他のクラブとの競争の中で決定づけられる要因であった。

しかし、Jリーグのいくつかのクラブは、クラブ単独の取り組みで人気を獲得したクラブがあり、その事例を以下に示す。これらは主に社会貢献に対する取り組みや観戦の魅力を高めるエンターテインメント性の向上による娯楽としての魅力向上などが挙げられる。

〔ヴァンフォーレ甲府の取り組み〕

- ▶ 地域貢献・地域交流を徹底し、クラブが地域と共にあることを明確化した。
- ▶ 地元で大企業はないが、地域のクラブとして認識されることで商工会会員など小口のスポンサーを多数集めている。
- ▶ 地元の勝利セールなどが多く開催され、地域が一丸となって応援している。

- ▶ スポンサーの増加・入場者数の増加（651社/7.5億円）
- ▶ 勝利セールの結果、クラブの知名度向上と地元商店街の活性化に寄与した。
- ▶ 県民のクラブとして認識され、カテゴリーや成績に関わらず一定の入場者数がある。

■ ヴァンフォーレ甲府の主な社会貢献活動

小学校巡回スポーツ教室



小学校の体育の授業を対象とした巡回スポーツ教室では、「スポーツの楽しさ」や「スポーツによる教育的側面」などを十分に意識した活動です。

ヴァンフォーレ甲府の専属コーチが小学校の授業で講師を務めスポーツの楽しさや生涯にわたって身体を動かすことの素地を養います。また集団で活動する中で「思いやり、協調、尊重」などの大切さを伝えています。

2016年 巡回校一覧

No.	学校名	人数	No.	学校名	人数	No.	学校名	人数
1	甲府市立新田小学校	46	11	笛吹市立横川小学校	25	21	南アルプス市若草小学校	96
2	甲府市立甲斐小学校	48	12	甲斐市立双葉東小学校	339	22	南アルプス市吾妻南小学校	60
3	大月市立七保小学校	45	13	甲斐市立双葉東小学校	338	23	南アルプス市豊小学校	55
4	甲府市立山城小学校	162	14	甲斐市立数島南小学校	247	24	南アルプス市立白根東小学校	62
5	都留市末生第一小学校①	110	15	甲斐市立数島南小学校	196	25	甲斐市立数島小学校	75
6	都留市末生第一小学校②	128	16	甲斐市立竜王東小学校	131	26	笛吹市立春日居小学校	57
7	笛吹市立御坂東小学校	61	17	甲斐市立竜王東小学校	149	27	大月市立鳥沢小学校	21
8	笛吹市立一宮北小学校	23	18	甲斐市数島北小学校	106	28	南アルプス市白根源小	115
9	都留市旭小学校	34	19	甲斐市数島北小学校	115	29	大月市立猿橋小学校①	149
10	都留市東桂小学校	67	20	西桂町立西桂小学校	149	30	大月市立猿橋小学校②	155
全30回 合計3,364人								

介護予防事業



地域の人たちが、介護を必要としない健康なお年寄りになっていただくため、各会場で運動し、健康づくりや仲間づくりを推進すべく、2007年度から「ヴァンフォーレ甲府シニアわくわく健康運動教室」と題し、ボールを使った運動を中心に、様々なプログラムに取り組んでいます。

各自治体からも協力をいただき、クラブと自治体（ホームタウン）が一体となって、地域住民の生活に新しい喜びをもたらすことができるよう取り組んでいます。

また、本年度はスタジアムにて健康運動教室を実施しました。

2016年 会場一覧

会場	実施日	会場	実施日
石和清流公園芝生広場 笛吹市(2008年~)	09月15日	山梨大学医学部G 中央市(2010年~)	11月01日
	09月29日		11月08日
	10月13日		11月15日
	10月20日		11月22日
	10月19日		11月29日
島上条公園多目的コート 甲斐市(2009年~)	10月26日	三ツ峠フットサルコート 西桂町(2014年~)	年度内開催予定
	11月02日		
	11月09日		
	11月16日		

出典：ホームタウンレポート2016

2016 選手・マスコット・スタッフ参加活動一覧

Table with 4 columns: 回 (No.), 月日 (Date), 曜 (Day), 名称/活動名 (Activity Name). It lists various sports and community activities for the 2016 season, including football, basketball, and other sports events.

出典：ホームタウンレポート2016

ヴァンフォーレ甲府は上記の取り組みの結果、地域から高い支持を得ている。2006年以降、J2降格など成績不振に関わらず、常に10,000人以上の入場者数を得ていることは特筆すべきことであり、他のクラブでは見られない現象である。

Line graph showing attendance trends from 1999 to 2010. The x-axis represents years and the y-axis represents attendance numbers. The data points are: 1999 (1,469), 2000 (1,850), 2001 (3,130), 2002 (4,914), 2003 (5,796), 2004 (6,370), 2005 (6,931), 2006 (12,213), 2007 (13,734), 2008 (10,354), 2009 (11,059), 2010 (12,406).

↑ Jリーグ参入
↑ 経営問題発生
↑ 新経営体制発足

↑ 株主追加による増資

↑ J1昇格

■ 地域貢献が観戦動機となっている
↑ 1位 ↑ 2位 ↑ 1位 ↑ 1位

■ 地域貢献の評価
↑ 1位 ↑ 2位

※赤字はJ2リーグを示す。

〔川崎フロンターレの取り組み〕

- 地域貢献・地域交流を徹底し、地域のクラブであることを明確化した。
- スポンサーの協力のもと、食品に広告を入れるなど主婦層の理解を深め、夫・子供の試合観戦に対する理解を深めた。
- 選手が教材のモデルになっている算数ドリルを配布するなど、小学校と連携して選手の知名度を高めた。

- アンケートによる「クラブが地域に貢献をしている」は第1位。
- スタンド改修により、さらに入場者数が増加。
- 平均観客数 22,000 人はリーグ5位の入場者数。

	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
川崎F	5,247	7,258	9,148	13,658	14,340	17,338	17,565	18,847	18,562	17,340	17,807	16,644	16,661	20,999	22,136

↑ J1昇格

↑ 応援バナナ
↑ 算数ドリル配布

↑ メインスタンド改修

■ 地域貢献の評価

■ 地域貢献が観戦動機となっている

2位 10位 3位 5位 5位 12位 5位 6位 7位 9位 6位 11位 15位

↑ 2位 ↑ 1位 ↑ 1位 ↑ 1位 ↑ 1位 ↑ 1位 ↑ 1位 ↑ 1位

〔アルビレックス新潟の取り組み〕

- ワールドカップ開催時にスタジアムを整備。
- 大量の招待券を配布し、多くの人に観戦の機会を提供した。
- 売れ残った券を当日券として販売せず、無料で配布することで、常に満員の観客を集め、会場内に熱気を創出した。

- サッカー経験のないサポーターの比率 75.4%はJ1、J2クラブの中で第1位
- 年齢層の高いサポーターが多く、60歳以上の比率 22.7%はJ1、J2クラブ中1位
- 一方で、チケットを無料配布したことで、観客の購買意欲が減退したとの報道もある。

第2章 基本方針

Jリーグ各クラブ入場者数の推移(平均)

	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004
札幌						11,953	10,986	12,910	22,228	19,140	10,766	9,466
盛岡												
秋田												
仙台							7,470	8,885	14,011	21,862	21,708	16,198
山形							2,980	3,468	4,391	3,755	4,370	6,420
福島												
水戸								2,021	1,559	2,739	3,085	3,773
栃木												
群馬												
鹿島	14,016	16,812	19,141	15,386	16,985	15,345	17,049	17,507	22,425	21,590	21,204	17,585
浦和	11,459	18,475	19,560	24,329	20,504	22,706	21,276	16,923	26,720	26,296	28,855	36,660
大宮							2,674	3,477	3,864	5,266	5,058	6,108
千葉	20,273	22,262	15,418	12,008	5,693	5,365	5,774	6,338	7,818	7,897	9,709	10,012
柏			16,102	13,033	8,664	9,932	10,122	10,037	12,477	11,314	10,873	10,513
FC東京							3,498	11,807	22,313	22,173	24,932	25,438
東京V	25,235	24,926	20,834	17,653	10,933	13,338	9,379	7,609	19,396	15,128	17,563	15,059
町田												
川崎F							5,396	7,439	3,784	5,247	7,258	9,148
横浜FM	16,781	19,801	18,326	14,589	9,211	19,165	20,095	16,644	20,595	24,108	24,957	24,818
横浜FC									3,007	3,477	3,743	4,219
横浜F	15,464	19,438	15,802	13,877	10,084	15,895						
YS横浜												
相模原												
湘南		17,836	16,111	10,483	7,841	10,158	7,388	4,968	4,112	4,551	4,731	4,691
甲府							1,469	1,850	3,130	4,914	5,796	6,370
長野												
松本												
新潟							4,211	4,007	16,659	21,478	30,339	37,689
富山												
金沢												
清水	18,462	19,726	19,747	12,962	9,888	12,298	12,883	12,422	15,973	14,963	16,284	13,568
磐田		14,497	17,313	13,792	10,448	12,867	12,273	12,534	16,650	16,564	17,267	17,126
藤枝												
名古屋	19,858	21,842	21,463	21,699	14,750	13,993	14,688	14,114	16,974	16,323	16,768	15,712
岐阜												
京都				9,404	7,881	8,015	8,859	7,253	3,808	10,352	10,850	7,807
G大阪	21,571	22,367	13,310	8,004	8,443	8,723	7,996	9,794	11,723	12,762	10,222	12,517
C大阪			12,097	8,229	9,153	9,864	10,216	13,548	11,857	7,952	13,854	14,323
神戸					6,567	7,686	7,691	7,512	13,872	10,467	11,195	15,735
広島	16,644	17,191	11,689	8,469	6,533	8,339	9,377	8,865	9,916	10,941	9,000	14,800
鳥取												
岡山												
山口												
讃岐												
徳島												
愛媛												
福岡				9,737	8,653	10,035	11,467	13,612	13,822	6,491	7,417	8,743
北九州												
鳥栖							3,385	3,714	3,479	3,890	3,172	3,610
長崎												
熊本												
大分							3,886	4,818	6,638	12,349	21,373	21,889
鹿児島												
琉球												
FC東23												
G大23												
C大23												

出典:リーグ公式記録より編集(<https://www.jleague.jp/>)

※黒字はJ1、赤字はJ2、青字はJ3

Jリーグ各クラブ入場者数の推移(平均)

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
札幌	11,133	10,478	12,112	14,547	10,207	10,738	10,482	12,008	10,075	11,060	11,960	14,559
盛岡										1,522	1,239	1,188
秋田										1,773	1,998	2,425
仙台	15,934	14,453	14,685	14,080	12,951	17,332	15,656	16,600	14,866	15,173	14,924	15,467
山形	5,949	5,085	4,243	6,273	12,056	11,710	9,325	7,355	7,020	6,348	10,030	6,254
福島										1,321	1,289	1,678
水戸	3,334	3,017	2,415	3,044	2,673	3,608	3,349	3,973	4,630	4,734	4,816	5,365
栃木					4,706	4,157	4,939	3,850	4,922	5,294	5,167	4,917
群馬	3,959	3,736	3,808	4,215	4,330	4,424	3,211	3,341	3,571	3,760	4,099	4,744
鹿島	18,641	15,433	16,239	19,714	21,617	20,966	16,156	15,381	16,419	17,665	16,423	19,103
浦和	39,357	45,573	46,667	47,609	44,210	39,941	33,910	36,634	37,100	35,516	38,745	36,935
大宮	9,980	10,234	11,465	9,350	13,707	11,064	9,099	10,637	11,138	10,811	9,490	11,814
千葉	9,535	13,393	14,149	14,084	14,730	11,689	9,680	9,281	10,004	9,333	10,725	10,292
柏	12,492	8,328	12,967	12,308	11,738	8,098	11,917	13,768	12,553	10,715	10,918	10,728
FC東京	27,101	24,096	25,290	25,716	25,884	25,112	17,562	23,955	25,073	25,187	28,784	24,037
東京V	14,716	5,705	7,327	14,837	5,521	5,572	5,710	5,341	6,343	5,430	5,655	5,402
町田								3,627		3,134	3,766	5,123
川崎F	13,658	14,340	17,338	17,565	18,847	18,562	17,340	17,807	16,644	16,661	20,999	22,136
横浜FM	25,713	23,663	24,039	23,682	22,057	25,684	21,038	22,946	27,496	23,088	24,221	24,004
横浜FC	5,938	5,119	14,039	6,793	3,535	5,791	5,770	6,039	6,064	5,146	5,113	4,892
横浜F												
YS横浜										1,018	919	1,018
相模原										3,133	3,291	4,344
湘南	5,746	5,365	4,677	5,994	7,273	11,095	6,943	6,852	9,911	8,478	12,208	11,530
甲府	6,931	12,213	13,734	10,354	11,059	12,406	12,106	10,407	12,614	12,171	11,297	10,833
長野										3,595	4,733	5,018
松本								9,531	11,041	12,733	16,823	13,631
新潟	40,114	38,709	38,276	34,490	33,446	30,542	26,049	25,018	26,112	22,979	21,936	21,181
富山					3,740	4,463	3,275	3,324	4,474	4,266	2,820	3,608
金沢										3,440	4,910	4,179
清水	12,752	14,302	15,952	16,599	17,935	18,001	15,801	15,121	14,137	14,210	14,803	11,274
磐田	17,296	18,002	16,359	15,465	13,523	12,137	11,796	13,122	10,895	8,774	10,041	14,611
藤枝										1,319	1,103	1,531
名古屋	13,288	14,924	15,585	16,555	15,928	19,979	16,741	17,155	16,135	16,734	16,240	17,729
岐阜				3,745	4,302	3,108	4,120	4,270	4,525	7,584	6,179	5,662
京都	7,857	9,781	6,629	13,687	11,126	10,510	6,294	7,273	7,891	7,520	7,491	6,524
G大阪	15,966	16,259	17,439	16,128	17,712	16,654	16,411	14,778	12,286	14,749	15,999	25,342
C大阪	17,648	13,026	6,627	10,554	9,912	15,026	14,145	16,913	18,819	21,627	12,232	12,509
神戸	14,913	6,910	12,460	12,981	13,068	12,824	13,233	14,638	11,516	15,011	16,265	17,018
広島	12,527	11,180	11,423	10,840	15,723	14,562	13,203	17,721	16,209	14,997	16,382	15,464
鳥取							3,692	3,133	4,097	3,069	1,932	1,898
岡山					6,162	7,161	7,258	7,985	8,574	8,404	8,412	10,017
山口											4,367	6,654
讃岐										3,317	3,658	3,686
徳島	4,366	3,477	3,289	3,862	4,073	4,614	5,207	3,991	4,348	8,884	5,019	4,565
愛媛		4,139	3,317	3,704	3,694	4,386	3,475	3,629	3,950	3,820	3,771	4,089
福岡	10,786	13,780	9,529	10,079	7,763	8,821	10,415	5,586	5,727	5,062	8,692	12,857
北九州						4,189	4,051	3,346	3,175	3,622	3,488	3,224
鳥栖	7,855	7,465	6,114	7,261	5,939	6,633	7,731	11,991	12,026	14,137	13,450	12,636
長崎									6,167	4,839	5,093	5,225
熊本				5,279	6,006	6,907	6,928	5,855	6,227	7,002	7,037	5,543
大分	22,080	20,350	19,759	20,322	18,428	10,463	8,779	9,721	11,915	8,422	7,533	7,771
鹿児島												3,665
琉球										1,398	1,498	1,561
FC東23												2,797
G大23												2,401
C大23												1,488

出典:リーグ公式記録より編集(<https://www.jleague.jp/>)

※黒字はJ1、赤字はJ2、青字はJ3

2) 沖縄県での入場者数増加に向けた取り組み（案）

a. サッカー振興

サッカーは世界的人気の高いスポーツであり、多くの人々が注目し熱く応援することで、観光振興や人材育成などのさまざまな波及効果が期待できる。

しかし、これまで推計したように沖縄県内で20,000人の入場者数を獲得することは、県民の支持がなければ実現できないことであり、多くの人々がサッカーというスポーツに親しみ、理解を深め会場に足を運んでもらえるようにしなければならない。

以下に競技団体、クラブ、県が連携し競技としてのサッカー振興を図るために考えられる取り組みを示す。

〔サッカーの競技人口の拡大〕

県民のサッカーに対する興味を高めるためには、より多くの人々が実際にプレーを経験し、スポーツとしての楽しみを知ることが効果的である。自らプレーすることで実体験を伴ってプレーを判断できるようになり、観戦の楽しみが深まると考えられる。

この中には、将来のJリーガーを目指す子どもたちも多く含まれると考えられ、子どもの憧れは親を伴った集客にもつながると考えられる。

以下に主に子どもたちの競技人口を拡大するための取り組みを検討する。

■学校教育との連携

多くの人にとってスポーツとの関わりは、幼児教育・学校教育の中で始まると考えられ、この時期にサッカーを体験させ、好きになってもらうことは、生涯にわたってサッカーに親しむ人を増やすことにつながると考えられる。

学校教育で指導内容を決定する際の基準としては、学習指導要領がまとめられており、小学校体育の中には“ボール遊び”と示されている。このため、具体的な種目については、教員が適宜選択することになり、教員がサッカーを選択しやすくするための指導プログラムの作成や教員向け研修会、勉強会の開催等の支援は効果的であると考えられる。

■競技環境の整備（身近なピッチの整備・ボールの配布）

サッカーをプレーするためには最低限ボールとピッチが必要であり、他の競技ほど多くの施設・設備は不要である。

現在、沖縄県内でサッカーのできる施設は限られており、公園のグラウンドは常に予約が埋まり、校庭についても野球と譲り合って使用する場合が大半であり、競技人口と比較して絶対量が足りていないことが理解できる。

今後、サッカーの競技人口をさらに増やしていくためには、校庭の芝生化も含めた身近なプレー環境を拡充する必要がある。

また、サッカーボールについても各学校のクラス単位で使用できるボールをスポンサーと協力して配布するなどの取り組みは競技人口拡大に効果があると考えられる。

■競技環境の整備(クラブの育成)

サッカーを真剣にプレーするためには一定数の仲間が必要であり、さらにレベルアップを図るためには優秀な指導者の存在が必要である。

また、日常生活の中で多くの人がスポーツに取り組むためには、生活圏の中に活動場所があることが重要であり、県内広域をカバーするためには、多くのクラブが活動していることが大切である。

サッカーの指導者養成やスポーツ少年団等の設立支援など、仲間とプレーできる機会を増やすとともに指導の質の向上を図るなど、環境整備を充実させることが重要である。

〔興味を持たせるきっかけづくり〕

子どもたちがスポーツをはじめのきっかけはさまざまであるが、たまたま体験したことが楽しかったり、人気選手と触れ合いその人柄に惹かれるなど、小さな出来事がきっかけとなって、より深く熱中していくことは少なくないと考えられる。

このため、より多くの人がサッカーと触れ合うきっかけを創出することは、競技人口を増加させるために重要であり、以下にその可能性を示す。

■体験イベント等の実施

サッカーと触れ合うきっかけとしてイベントの際にキックターゲットやリフティングなど、ゲーム性の高い催しを提供し、より多くの子どもたちにボールを蹴るきっかけを提供する。

これらの取り組みは既に各所で試みられており、今後はその機会を増加しより多くの人がゲームに参加できるよう取り組みを拡充していくことが大切である。

■習い事としての魅力向上

近年、子育てに熱心に取り組む親が増加し、3～6歳の時点で6割を超える子どもたちが何らかの習い事を開始しており、新たに習い事に取り組もうとしても、その時間を確保することが困難な状況となっている。

サッカー人口を増やすためには、幼児教育にむけたプログラムの開発が必要である。

この時期の習い事としては、スイミングの実施率が最も高い。これは安全性が確保されていることと、幼児期の子どもたちの健全な発達の効果が認識されているためであり、サッカーを幼児期から開始させるためには安全性の確保を絶対条件とし、ボールによる神経の発達など、成長時期に合わせた効果を謳うことが効果的である。

b. 人気の高いJ1クラブ育成策

前項において、サッカーの競技人口を増加する取り組みの可能性について検討したが、より多くの入場者数を獲得するためには、高齢者や女性などサッカーをプレーしたことのない人も含めた広範囲な人に興味を持ってもらうことが大切である。

本項においては、サポーターの育成という視点から、クラブの人気を高める手法について検討する。

〔J1クラブの育成〕

Jリーグクラブはカテゴリーが上位のクラブほど入場者数が多く、J1の平均入場者数は17,800人に達し、J3クラブとは約7倍の差がある。

このため、今後整備されるスタジアムの入場者数を高めるためには、J1クラブの育成が必要であり常にJ1に定着していることが重要である。

さらに上位争いに加わることで人気を高め、多くの入場者数を獲得する効果が期待できる。

〔観戦環境の充実〕

入場者数増加要因の推定で明らかなようにスタジアム整備など観戦環境の向上は、入場者数増加の効果が期待できる。

ドイツのブンデスリーガの例では、2006年のFIFAワールドカップ開催に向けて多くのスタジアム整備が進展し、観戦環境が快適となったことで女性客が目立つようになったと言われている。

観戦環境の充実は、それだけが入場者数増加の主な要因とはなりえないが、それまで寒さや雨に濡れるのを不快に感じてスタジアムに足を運んでいなかった観客層の足をスタジアムに向かせる効果は期待でき、新たなスタジアム整備も重要な要因の一つである。

〔新しい応援手法など試合の演出方法の開発〕

サッカー観戦の楽しみは人それぞれであり、プレーを見るだけでなく声援や応援歌、応援旗などもサポーター同士の絆を深め、観戦の楽しみを増す手段の一つである。

欧州では、新しい応援スタイルを生み出しているサポーターもいて、それがクラブの名物となっている。

沖縄県のJリーグクラブにおいても応援する人の一体感を高め、老若男女が楽しめる応援方法を開発することで、スタジアムに足を運ぶ動機づけになると考えられ、今後開発していくことが必要である。

〔県出身人気選手の育成〕

沖縄県のJリーグクラブにおいて県出身選手がユースから成長し、トップチームに昇格していく姿は、多くのサポーターがより強い思い入れを抱いて応援する対象となる。

県出身選手が存在することで観客の関心が高まることから、その育成は重要である。

〔アカデミーの充実など選手育成体制の強化〕

前記の県出身選手の育成を図るためには、アカデミーの充実など選手育成体制を強化することが必要である。

有望な選手をいち早く獲得し、将来のJリーガーとして活躍できる選手を一人でも多く輩出するため、地域と連携した育成体制や一貫指導などに取り組んでいくことが必要である。

〔魅力的な企画などエンターテイメント性の向上〕

J1クラブであるフロンターレ川崎やヴァンフォーレ甲府は多くの方がスタジアムに足を運んでもらえるように、さまざまな企画を実現している。

このような企画はそれ自体が魅力となって集客に寄与すると同時に企画を行うことで常に新しい情報をサポーターに提供できるという効果も期待できる。

このような企画の宣伝効果は予想以上に大きい場合があり、それまで興味はあるが観戦をためらっていた観客層を取り込むなど、入場を後押しする効果が期待できる。

〔社会貢献による県民クラブとしての認知〕

Jリーグクラブは地域の連帯感を高め、熱く応援する心が地域の活力を高めてくれる存在であり、地域から親しまれる県民共有の財産でなければならない。

Jリーグではこうした各クラブの地域における役割を認識し、「Jリーグ百年構想」を掲げて地域密着の姿勢を明確化してきた。

沖縄県におけるJリーグクラブも県民クラブとして愛されるためには、さまざまな社会貢献活動を積極的に行い、ピッチの外でも地域から親しまれることが重要である。

5. 交通条件に関する試算

奥武山公園は那覇市の中心にあり全利用者に対応した駐車場の確保は現実的でなく、公共交通等の利用を呼び掛けることになるが、各交通手段の交通容量について以下に検証する。

(1) 利用者数の設定

本スタジアムで行われるJリーグ公式試合において、最大20,000人の入場者数があった場合の交通条件について検証する。

また、奥武山公園には多数の体育施設が立地し、イベント日程が重なることも考えられ、プロ野球利用と重なった場合の交通容量についても検証する。

(2) ケース1 (Jリーグ公式試合 20,000人)

1) 利用フレーム

奥武山公園に訪れる利用者の交通手段については、「奥武山公園整備全体計画調査業務(平成24年 那覇市)」において、那覇市民に対するアンケート調査を実施しており、この中で、利用する交通手段を問うているため、この割合を活用し、20,000人の入場者数があった場合の各交通手段の利用者数を右表のとおり算出する。

交通規模の推計

交通手段	比率	人数
乗用車	38%	7,600
モノレール	26%	5,200
路線バス	3%	600
タクシー	2%	400
自転車・オートバイ	7%	1,400
徒歩	24%	4,800
計	100%	20,000

※奥武山公園整備全体計画調査業務

平成24年 那覇市

※比率はアンケートの無回答を除き按分した値

※乗用車の乗車人数2.5人/台

2) 各交通手段の容量

〔乗用車〕

乗用車については、約38%が利用すると回答しており、20,000人規模の利用があった場合、乗用車の利用を希望する人は7,600人である。平均乗車人数は2.5人と設定し、発生する自動車の台数は3,040台となる。

$$\text{駐車場必要台数} : 20,000 \text{人} \text{ (観客数)} \times 38\% \text{ (利用率)} \div 2.5 \text{人/台} \text{ (乗車人数)} = 3,040 \text{台}$$

奥武山公園には593台の駐車場があるが他の体育施設の大会利用と重なること、関係者VIP専用の駐車場も必要であることから一般利用者駐車場は考慮せず、周辺民間駐車場の利用を検討する。

〔モノレール〕

モノレールについては、26%の人が利用すると回答しており、利用人数は5,200人となる。モノレールの利用については、首里方面利用者と那覇空港方面利用者に分けられると考えられるが、モノレールは那覇市内しか運航していないため、主な利用者は那覇市民であると推定し、首里方面の利用者は、那覇市本庁地区10万人、真和志地区10.5万人、首里地区5.5万人の計26万人を利用対象者とし、反対に小禄地区は6万人を利用対象者とする。この時の首里方面の利用者と那覇空港方面の利用者の比率は8:2と設定する。

したがって、首里方面の利用者は5,200人の80%で4,160人である。全員が乗車するまで

の時間は、2両編成のモノレールの定員は165人であり、乗車率を180%と設定すると1便で297人を輸送できる。(参考：首都圏の混雑時の乗車率200%)

モノレールは那覇まつり等の際に増便があり、最大で1時間に11便を運航しているため、全員が乗車するのにかかる時間は76分である。

首里方面利用者数：20,000人^(観客数)×26%^(利用率)×80%^(首里方面)=4,160人

乗車までの時間：4,160人^(乗車人数)÷(165人^(定員)×180%×11編成/h^(最大運行本数))×60分=76分

反対方面の那覇空港方面への利用者は5,200人の20%で1,040人であり、同様の計算を行うと全員が乗車するのにかかる時間は19分となる。

那覇空港方面利用者数：20,000人^(観客数)×26%^(利用率)×20%^(首里方面)=1,040人

乗車までの時間：1,040人^(乗車人数)÷(165人^(定員)×180%×11編成/h^(最大運行本数))×60分=19分

〔路線バス〕

利用者の3%が路線バスを利用すると回答しており、利用者数は600人である。路線バスの定員は60人であり、乗車台数は10台となる。しかし、実際には路線バスは、那覇バスターミナルに52路線が運行しており、行先に応じて分散が図られることから、多少の待ち時間はあるものの、大きな混雑にはならないと考えられる。

路線バス利用規模：20,000人^(観客数)×3%^(利用率)÷60人/台^(乗車人数)=10台

〔タクシー〕

利用者の2%がタクシーを利用すると回答しており、利用者数は400人である。乗用車と同様の乗車率と設定すると160台のタクシーを利用することになる。

駐車場必要台数：20,000人^(観客数)×2%^(利用率)÷2.5人/台^(乗車人数)=160台

〔自転車・オートバイ〕

利用者の7%が自転車・オートバイを利用すると回答しており、利用者数は1,400人である。このため、自転車・オートバイの両方が利用する駐輪場は1,400台分が必要である。

〔徒歩〕

利用者の24%は徒歩と回答しており、利用者数は4,800人である。

(3) ケース2 (Jリーグ公式試合 20,000人+プロ野球オープン戦 15,000人)

1) 利用フレーム

奥武山公園には多くのスポーツ施設が立地しているため、日程が重なることも考えられる。

Jリーグ以外の利用で人数が多い大会はプロ野球が考えられるが、プロ野球公式戦は日程の関係で、火・水曜日の利用以外は考え難く、Jリーグが公式試合を開催する土・日曜日の競合はないと考えられる。

一方、オープン戦については、2月下旬の土・日曜日に開催されており、競合の可能性があるため、この時の交通容量を検証する。

Jリーグの利用フレームは先と同条件である20,000人とし、プロ野球オープン戦は15,000人と設定する。この時の各交通手段別の利用者数をケース1と同様の手法で算出し、右表のとおりとなる。

交通規模の推計

交通手段	比率	人数
乗用車	38%	13,300
モノレール	26%	9,100
路線バス	3%	1,050
タクシー	2%	700
自転車・オートバイ	7%	2,450
徒歩	24%	8,400
計	100%	35,000

※奥武山公園整備全体計画調査業務

平成24年 那覇市

※比率はアンケートの無回答を除き按分した値

※乗用車の乗車人数2.5人/台

2) 各交通手段の容量

〔乗用車〕

ケース1と同様の手法で推計すると乗用車の利用者数は13,300人であり、駐車場の必要台数は5,320台となる。

$$\text{駐車場必要台数} : 35,000 \text{人} (\text{観客数}) \times 38\% (\text{利用率}) \div 2.5 \text{人/台} (\text{乗車人数}) = 5,320 \text{台}$$

ケース1同様に駐車場については、周辺民間駐車場の利用を検討する。

〔モノレール〕

モノレールについても同様にケース1同じ計算式で算出すると、首里方面の利用者は7,280人いて、全員が乗車するまでにかかる時間は134分である。

$$\text{首里方面利用者数} : 35,000 \text{人} (\text{観客数}) \times 26\% (\text{利用率}) \times 80\% (\text{首里方面}) = 7,280 \text{人}$$

$$\text{乗車までの時間} : 7,280 \text{人} (\text{乗車人数}) \div (165 \text{人} (\text{定員}) \times 180\% \times 11 \text{編成/h} (\text{最大運行本数})) \times 60 \text{分} = 134 \text{分}$$

同様に那覇空港方面への利用者は1,820人であり、同様の計算を行うと全員が乗車するまでにかかる時間は33分となる。

$$\text{那覇空港方面利用者数} : 35,000 \text{人} (\text{観客数}) \times 26\% (\text{利用率}) \times 20\% (\text{首里方面}) = 1,820 \text{人}$$

$$\text{乗車までの時間} : 1,820 \text{人} (\text{乗車人数}) \div (165 \text{人} (\text{定員}) \times 180\% \times 11 \text{編成/h} (\text{最大運行本数})) \times 60 \text{分} = 33 \text{分}$$

〔路線バス〕

路線バスについてもケース1と同様の手法で推計すると利用者数は1,050人、乗車台数は17.5台となる。

$$\text{路線バス利用規模} : 35,000 \text{人} (\text{観客数}) \times 3\% (\text{利用率}) \div 60 \text{人/台} (\text{乗車人数}) = 17.5 \text{台}$$

〔タクシー〕

同じくタクシーについては利用者数が700人で利用台数は280台となる。

駐車場必要台数：35,000人^(観客数)×2%^(利用率)÷2.5人/台^(乗車人数)=280台

〔自転車・オートバイ〕

同じく自転車・オートバイの利用者数は2,450人となる。

〔徒歩〕

同じく徒歩の利用者数は8,400人である。

参考：セルラースタジアム那覇で実施されたプロ野球関連利用

利用フレームの根拠となる過去のプロ野球関連試合開催実績は以下のとおりである。

セルラースタジアム那覇開催プロ野球公式戦

2010年6月29日 (火)	横浜vsヤクルト	21,239
2010年6月30日 (水)	横浜vsヤクルト	21,030
2011年7月5日 (火)	横浜vs広島	16,475
2011年7月6日 (水)	横浜vs広島	16,346
2012年6月26日 (火)	横浜vsヤクルト	10,271
2012年6月27日 (水)	横浜vsヤクルト	10,934
2013年7月9日 (火)	阪神vs中日	15,714
2013年7月10日 (水)	阪神vs中日	16,355
2014年7月8日 (火)	横浜vs巨人	台風中止
2014年7月9日 (水)	横浜vs巨人	16,416
2015年6月30日 (火)	横浜vs中日	10,292
2015年7月1日 (水)	横浜vs中日	12,758
2016年6月28日 (火)	オリックスvs楽天	12,979
2016年6月29日 (水)	オリックスvs楽天	13,582

セルラースタジアム那覇開催プロ野球オープン戦

2011年2月26日 (土)	巨人vs横浜	16,376
2011年2月27日 (日)	巨人vsヤクルト	15,356
2012年2月25日 (土)	巨人vs横浜	11,369
2012年2月26日 (日)	巨人vsロッテ	中止
2013年2月23日 (土)	巨人vs広島	9,187
2013年2月24日 (日)	巨人vs楽天	10,869
2014年2月22日 (土)	巨人vs横浜	9,115
2014年2月23日 (日)	巨人vs楽天	14,282
2015年2月21日 (土)	巨人vs広島	12,356
2015年2月22日 (日)	巨人vs楽天	9,215
2016年2月20日 (土)	巨人vs横浜	9,642
2016年2月21日 (日)	巨人vs広島	10,478

SUZUKI日米野球シリーズ親善試合

2014年11月20日 (木)	侍ジャパンvs全MLB	16,376
-----------------	-------------	--------

第2章 基本方針

(4) 交通条件に関するまとめ

1) ケース1 2万人来場時の交通容量

乗用車	7,600人	3,040台	周辺民間駐車場の活用※
モノレール(首里方面)	4,160人	76分	イベント対応増便(2両編成)
モノレール(空港方面)	1,040人	19分	イベント対応増便(2両編成)
路線バス	600人	10台	
タクシー	400人	160台	
自転車・オートバイ	1,400人	1,400台	
徒歩	4,800人	-	

※関係者・VIPはスタジアムに確保

2) ケース2 2万人+プロ野球オープン戦1.5万人 計3.5万人来場時の交通容量

乗用車	13,300人	5,320台	周辺民間駐車場の活用※
モノレール(首里方面)	7,280人	134分	イベント対応増便(2両編成)
モノレール(空港方面)	1,820人	33分	イベント対応増便(2両編成)
路線バス	1,050人	17.5台	
タクシー	700人	280台	
自転車・オートバイ	2,450人	2,450台	
徒歩	8,400人	-	

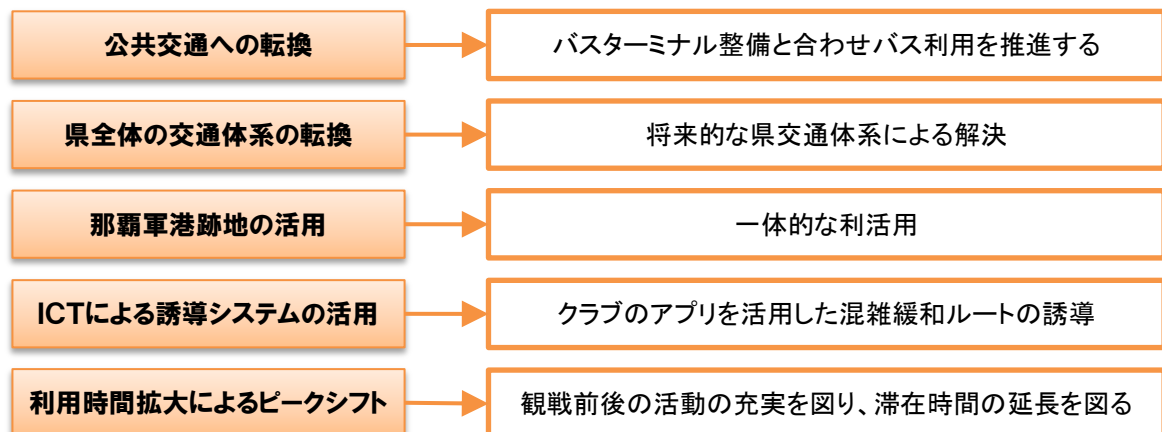
3) 想定される対応策

前述のとおり、駐車場の不足は顕著であるが、奥武山公園のこうした利用条件は多くの県民にとって既知の条件であり、民間駐車場の活用や家族に送迎してもらうなどの対応をとっている。

また、モノレールの交通容量も不足しているため、利用までに時間がかかることも課題になると考えられる。

将来計画も含めた交通条件緩和の対応策は以下のとおりである。

交通条件緩和に向けた対応策の一例



6. 導入機能の検討

(1) スタジアム機能

1) 機能配置と動線計画

スタジアムを整備する上で、規模に次いで重要な検討事項は「機能配置」と「動線計画」である。サッカーの試合には多くの観客や関係者が訪れ、セキュリティ等の関係から、人によって、立ち入りのできる範囲に制限を設けるべきである。

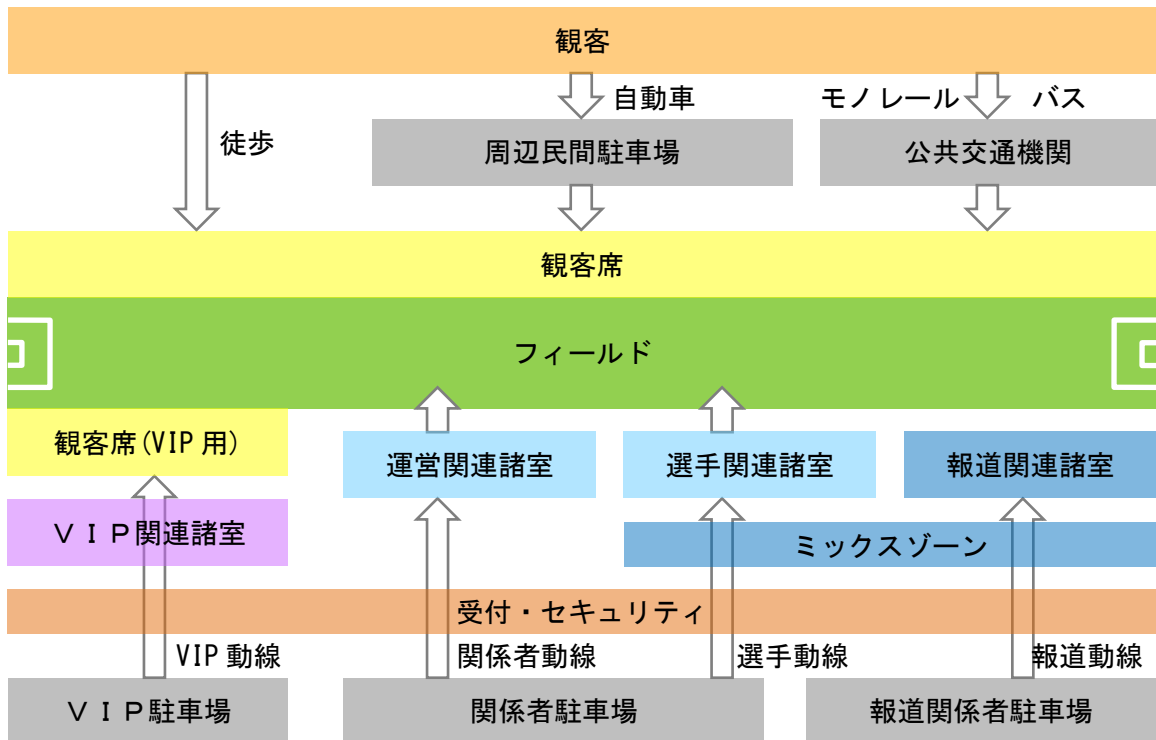
スタジアムを利用する人を大きく区分すると、「観客」、「選手・運営スタッフ」、「報道関係者」であり、それぞれ目的や利用内容が異なるため必要とする施設が異なり、明確に区分する必要がある。

特に観客とそれ以外の利用者については、安全管理の問題から明確な区分が必要であり、また、「選手・運営スタッフ」と「報道関係者」もセキュリティを確保するため立ち入りを制限する必要がある。

さらに観客については、一般客とVIPは明確な区分が必要であり、VIPにはスポンサー等、クラブ運営に重要なゲストであり、一般客と入口から区別し、入場から退場まで、十分なホスピタリティを提供することが重要である。

動線と機能配置の概念は以下のとおりである。

スタジアム諸機能配置図



※「スタジアム標準」より一部改変

2) 競技機能

サッカーをプレーする上で欠かせない機能であり、スタジアム検査要項 2017 年度用において、天然芝又は Jリーグが認めたハイブリット芝で平坦性、常緑、水はけがよいことと定められている。

ピッチの寸法は長さ×幅=105m×68mとなり、これに選手の安全を守る芝生面の余幅が 5m 以上必要である。

また、方位については、太陽の位置によってプレーの支障となるため、両ゴールを南北に配置し、観客・関係者、テレビカメラ等が西日の影響を受けないようにメインスタンドを西側に配置することが基本となる。

スポーツはプレーのレベルが高くなるにつれ、施設への要求精度も高くなり、サッカーという競技の特性上、芝の状態によって、ボールの走りが異なってイレギュラーの原因となるため、品質の高いスポーツターフが必要である。

特にサッカー選手はピッチ上を激しく走り回るため、足腰への負担が少なくクッション性の高い厚く覆われたターフが要求される。

こうした競技に関する条件や沖縄県の気候を勘案すると、ティフトン芝が適しており、さらに冬場は芝生が成長を停止し、使用で傷むと回復できないため、ウィンターオーバーシードが必須となる。

ティフトン芝は、成長量・回復力が高く、芝質が柔らかいことが特長であるが、その分、施肥や刈込頻度など管理の手間が大きい。常に品質を高く保つためには正しい知識と、適切な管理が必要となる。

また、スタジアムは、観客席が周囲を取り囲み、屋根に覆われるが、芝にとっては太陽光と風通しが必要であり、一部のスタジアムではスタンドの形状によって、芝の生育が阻害されている例もあり、本スタジアムにおいては光と風の取り込みを十分に配慮することが必要である。



管理されたピッチ

競技機能の要点

- ▶ ピッチのサイズは 105m×68m、余幅を含めたフィールドのサイズは 115m以上×78m 以上となる。(ラグビー兼用の場合のフィールドサイズは 120m×80mである。)
- ▶ 方位はゴールを南北に配し、西側にメインスタンドを設置する。
- ▶ フィールドは天然芝で、平坦かつ芝の厚いクッション性の高い状態が必要。
- ▶ 芝の種類はティフトン+ウィンターオーバーシード。
- ▶ 日光、通風に配慮したスタンドと屋根の形状。

その他必要な施設

ゴール、チームベンチ、審判員ベンチ、場内放送システム、スコアボード、時計(45分計)、メンバー掲示板、掲揚ポール又はバトン、ピッチ周囲の広告等看板。

3) 選手関連機能

選手のためのロッカールームや審判、監督控室の他、近年はトレーナーの役割が高まり、専用のマッサージ室が必要である。これらは、ホーム、アウェイ両チームのものが必要である。

また、ドーピング検査のために対象選手や医師、マッチコミッショナーが試合後、待機できるドーピングルームも必要である。

主な選手関連施設は以下のとおりである。

選手関連の必要な施設

チーム更衣室、シャワー室、マッサージ室、監督室、室内ウォームアップエリア、審判更衣室、マッチ・コーディネーション・ミーティング室、ドーピングコントロール室



ロッカールーム



マッサージ室

4) 運営進行機能

試合の進行や安全管理、公式記録などすべての情報が集まり、運営の要となる機能である。

進行管理を円滑に進めるため、メインスタンドのピッチにアクセスしやすい位置に配置する。

主な施設は以下のとおりである。

運営進行関連の必要な施設

運営本部室、場内放送室、大型映像装置操作室、記録室、医務室、警察・消防指令室兼控室、トイレ、待合室等



運営本部室



大型映像装置操作室

5) メディア関連機能

Jリーグの試合には放送や出版など報道関係者が訪れる。これらは、試合の注目度によっても、要求される機能が異なるが、特に国際試合については、海外からの報道関係者も多数訪れるため、十分な規模が必要である。

運営進行関連の必要な施設

メディア受付、記者席、中継用実況放送室(テレビ、ラジオ)、記者室、カメラマン室、記者会見室、ミックスゾーン、フラッシュインタビューポジション、テレビ中継カメラ設置スペース、テレビニュース関連ENGカメラ設置スペース、伝送用機材設置スペース、ケーブル設置スペース等



記者席



記者会見室

6) 観戦機能

スタジアムにはプロサッカーの試合をはじめとする多くのスポーツイベント、各種イベント等を観戦・鑑賞するため、多くの観客が訪れ、選手の熱いプレーなどを身近に見て非日常の世界を味わっている。

このため、選手のプレーを間近で体感できるように選手と観客の距離を近づけ、また、観戦に収集できるように観戦環境を整えることが必要である。

スタジアム検査要項 2017年度用においては、全席個室であること、新設のスタジアムにおいては、全ての観客席を屋根で覆うことが求められている。

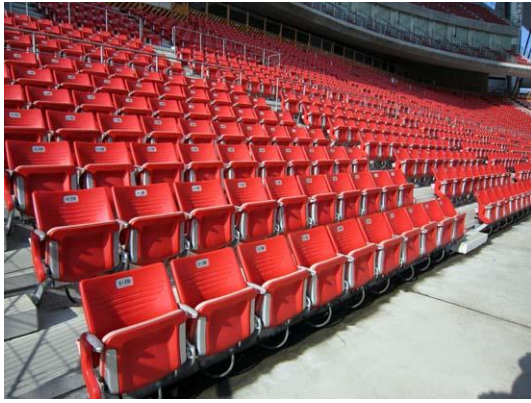
Jリーグの試合には多くの観客が訪れるため、時に群集として重大な事故につながることも懸念されるため、十分な面積の広場や動線を確保し、滞留が生じないように円滑な動線を確保することが必要である。

また、サッカーの試合では、飲食、トイレ等はハーフタイムに利用者が集中しやすいため、コンコースの幅と便器の数については、十分な量を確保する。

主な施設は以下のとおりである。

観戦関連の必要な施設

観客席、全ての観客席を覆う屋根、入場券売場、入場待機スペース、入場ゲート、総合案内所、救護室、授乳室、喫煙スポット、トイレ、コンコース、公衆電話、飲食売店、グッズ売場等



観客席は個席・背もたれ付



広々としたコンコース

7) V I P対応機能

V I Pはクラブ運営にとって重要な存在であり、V I Pへのもてなしは、世界各国で一般的な慣習となっている。

V I P席は一般の観客とは入口から動線を分け、試合展開が確認しやすいメインスタンド中心の適度な高さの位置に配置する。

また、V I Pの種類によって軽食等のサービスを提供するため、観客席の後部に個室又はラウンジを用意する。

特に最高位のV I Pは最高のホスピタリティを用意し、心から楽しんでもらうことでコミュニケーションがスムーズとなり、大きな商談につながりやすい。

これら施設は、試合を行っていない時でも会議や集会、レストラン、スタジアムウエディングなど多目的な利用も可能となるため運営を含めた検討が必要である。

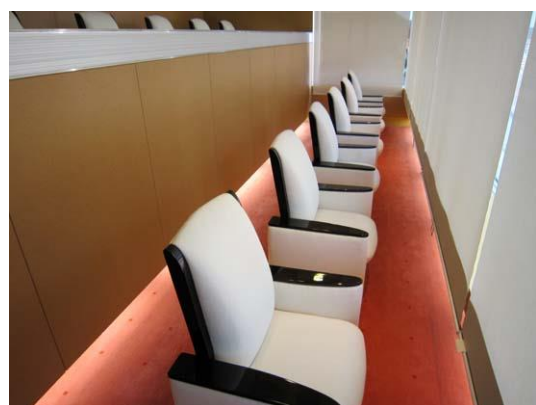
V I P対応の主な施設は以下のとおりである。

V I P対応関連の必要な施設

V I P (V V I P)席、V I P (V V I P)室、ビジネスラウンジ、スカイボックス等



V V I P室



V I P席

8) 安全管理機能

スタジアムには不特定多数の人が集まるため安全管理が重要である。観客は興奮すると暴徒化することもあり注意が必要である。

選手や関係者と観客が接触することは避ける必要があり、警備員の配置などフィールドへの観客の乱入防止策も検討しておく必要がある。

また、災害時の観客の避難誘導や緊急医療、テロ等、想定される事態にそれぞれ対策を講じる必要があり、ハード整備とともにマニュアル作成や日常的な訓練の実施等、ソフト面での対策も必要である。

安全管理に関する主な施設は以下のとおりである。

安全管理に必要な施設

警備本部室、テレビ監視システム、フェンス、スクリーン、侵入防止柵、火災予防、避難経路、AED等

9) 照明・電源

Jリーグ基準においては、フィールド上は1,500lxの照度が必要であり、観客の見え方やカメラの視界、プレーへの影響等を考慮して角度を設定すると示されている。

また、大型映像装置をはじめ、スタジアムは多くの電気を使用している。このため、万一の電源喪失などに備え、最低3時間程度利用可能な予備電源が必要である。

照明・電源関連施設

照明設備、予備電源等

10) その他諸室

「スタジアム標準」には定められていないが、演出や管理など、大会を運営する上で必要な諸室がある。これらは、主催者の運営によって、必要性や位置等が異なってくるため、整備段階で運営者とよく調整しておくことが重要である。

また、内容によっては他の諸室と兼用できる場合もあり、運用面を含めてよく検討することが必要である。

想定される主な施設は以下のとおりである。

その他運営時に必要となる諸室

セキュリティスタッフ控室、ボランティアスタッフ控室、ボールパーソン更衣室、エスコートキッズ控室、マスコット・演出関係控室、現金管理室等

なお、ここで示された各機能について、スタジアム検査要項2017年度用を巻末参考資料に示す。